

第1編

# 第5章

---

**薬学部**



## 第1節 沿革(年表)

表1 薬学部年表

年 月	事 項
1756年7月	熊本藩主細川重賢 薬園「蕃滋園」を開設
1885年3月	私立熊本薬学校設立認可
1885年4月	熊本区紺屋今町49番地で開校
1886年5月	熊本区手取本町に移転
1887年9月	熊本区山崎町19番地に移転
1908年4月	私立九州薬学校と改称
1909年3月	熊本県飽託郡大江村九品寺(現在地)に移転
1910年4月	専門学校令による専門学校に昇格し、私立九州薬学専門学校と改称
1925年1月	勅令第6号をもって文部省直轄学校に移管
1925年4月	官立熊本薬学専門学校開校
1927年	薬草園開設
1945年4月	製薬学科新設、従来のものを薬学科と称す
1949年5月	国立学校設置法(昭24法律第150号)の公布により熊本大学が設置され薬学部となる
1965年3月	実験研究棟A棟右半竣工
1965年4月	薬剤学科に生化学講座を増設
1966年3月	実験研究棟A棟左半竣工
1966年4月	薬剤学科の生薬学と生薬化学を合併統合して生薬学講座とし、薬品物理化学講座を新設
1967年3月	実験研究棟(B棟・C棟)竣工
1969年4月	製薬学科に放射薬品学講座を増設
1970年3月	実験研究棟C棟、講義棟竣工
1970年4月	製薬学科に生物薬品製造学講座を増設
1973年4月	製薬学科に製剤学講座を増設
1974年4月	薬学部附属薬用植物園設置
1977年3月	実験研究棟D棟、動物舎竣工
1979年11月	熊本大学創立三十周年記念式典挙行
1983年3月	体育館竣工
1984年3月	新RI実験棟竣工
1985年4月	薬剤学科と製薬学科を統合し、薬科学科に改組
1985年10月	熊薬百周年記念ホール竣工
1985年11月	薬学部創立百周年記念式典挙行
1991年10月	寄附講座・病態薬効解析学講座を設置
1993年3月	新福利施設(蕃滋館)竣工
1994年3月	実験研究棟(A棟・B棟)大型改修工事竣工
1994年3月	熊本大学機器分析センター棟竣工
1994年11月	実験研究棟(C棟・D棟)、講義棟大型改修工事竣工
1995年3月	動物舎改修増築工事竣工
2003年4月	薬学部附属薬用植物園は薬学教育部附属施設となる
2004年3月	大江総合研究棟竣工
2004年11月	宮本記念館竣工

年 月	事 項
2006年 4月	薬科学科を改組し、6年制学科「薬学科」と4年制学科「創薬・生命薬科学科」を設置
2006年 4月	薬学部附属創薬研究センター設置
2006年 4月	臨床薬理学分野と医療薬剤学分野を設置
2006年 4月	寄附講座・先端DDS学講座及び医療高分子学講座を設置
2008年 4月	文部科学省（教育GP）：「エコファーマを担う薬学人育成プログラム」の採択
2008年 4月	薬学部附属育薬フロンティアセンター設置
2010年 4月	薬学教育部附属薬用植物園を改組し、薬学部附属薬用資源エコフロンティアセンターを設置

## 第2節 概要

### 第1項 戦前及び薬学部開設まで

#### 1 熊本薬学校以前

##### (1) 復陽洞

肥後の地における薬育の初めとして記録に現れるものは、1736（元文元）～1743（寛保3）年間に創立された医家村井見朴の家塾復陽洞と言われている。復陽洞には薬園があり、そこで栽植したり又は肥後・豊後の細川領内で採集した薬草薬木や復陽洞所蔵の薬草薬品類が、麻黄から人参まで22種93品の目録に残されており、当時の薬学教育材料としては大変豊富で、復陽洞において実験的な薬学教育が行われたことが察せられる。

##### (2) 再春館と蕃滋園

熊本藩の組織的医学教育は第8代藩主細川重賢公によって始められた。1754（宝暦4）年、まず時習館を創立して文武両道の振興に努めた後、1756（宝暦6）年、藩直営の薬園再春館を創設して医学教育の道を開いた。設立の場所は角井で、今の熊本市二本木町附近であった。再春館は医育機関であるが、当時の医育は当然薬育をも含んでいた。蕃滋園は、再春館の薬圃とは別に1756（宝暦6）年7月、現在の熊本市薬園町の地に開設され、再春館が創設されると、その物産学実験実習場となった。1871（明治4）年廃藩置県により薬園は藤井氏個人の所有となった。1890（明治23）年総計154種の薬草薬木が当時の第五高等中学校に寄附された。これらの植物は後の第五高等学校植物園の基礎となり、現在の熊本大学理学部に引き継がれ、更にその中の一部は薬学部附属薬用資源エコフロンティアセンターに残っている。

##### (3) 再春館の閉鎖、古城治療所の開設

再春館は創立15年目の1771（明和8）年12月、山崎喰違土手の東側の藪を拓いて移転した。1870（明治3）年7月8日、新政に伴い再春館役職員は免職となり、1756（宝暦6）年天下に率先して創立された再春館は115年にしてその機能を終えた。再春館閉鎖の翌8月藩庁は古城に病院を興すことを決定し、10月6日治療所が開かれて再春館の図書備品類は

ここに引き継がれた。1877(明治10)年2月病院は西南戦争の兵火にあって焼失し、その後、1891(明治24)年4月ついに教場を閉鎖した。

#### (4) 熊本医学校

県令安岡良亮は、医学校兼病院が衰退の一途を辿ったため、県立医学校の設立を企画し、1876(明治9)年10月手取本町に開校した。しかし、西南戦争の兵火により焼失した。政府は1887(明治20)年、府県立医学校の経費を地方税で賄うことを禁じ、熊本医学校は翌1888(明治21)年3月に廃止された。

## 2 私立熊本薬学校

熊本の薬学教育については特別の教育機関はなく、医学教育の一部として取り扱われてきた。当時熊本に陸軍薬剤官として在住した町田伸(1881年東京大学薬卒)、平山増之助(1882年東京大学薬卒)、県立熊本医学校教諭兼薬務局長蔵田孝貞らは県下に薬学教育機関がないことを憂い、熊本区内の薬業家諸氏に薬学校設置の必要性を説いたところ、賛意が得られ、1885(明治18)年2月6日熊本県令富岡敬明に私立熊本薬学校設立願を提出した。これに対して、同年3月3日付をもって私立熊本薬学校の設立が認可され、熊本における独立した薬学教育機関が誕生した。この年から数えて2010(平成22)年は創立125年にあたる。1886(明治19)年5月、生徒の増加に伴い教室は手狭となり、熊本区の手取本町に建坪31坪の2階建民家を借り受けて移転した。また、区内藪の内町に私立熊本製薬所を設立した。1887(明治20)年7月には、区内山崎町19番地に敷地305坪の土地を購入し、更に2階建21.5坪の校舎1棟及び8坪の付属室1棟を建築し、9月新校舎に移転した。11月26日新校舎の開校式を兼ねて第1回卒業証書授与式を挙行了。新校舎への移転と同時に私立熊本製薬所の財産全部が本校に寄附された。1888(明治21)年1月、製薬士平山増之助氏に初代校長を嘱託した。1889(明治22)年7月平山校長辞任のため、製薬士中西司馬氏が第2代校長に就任した。1895(明治28)年4月には、中西校長が辞任し、専任教師の森本栄太郎氏が第3代校長を兼務することとなった。その後、1903(明治36)年5月森本氏の校長兼務を解き、安香堯行氏に第4代校長を嘱託した。

## 3 私立九州薬学専門学校

1905(明治38)年12月熊本県飽託郡本庄村に建築用地として2,600余坪(約8,600㎡)が購入された。しかし、本庄村の新築予定地は薬草園を付置するにはまだ手狭であったので、その隣接地の買収を試みたが、達成できなかった。熊本薬学校は、1908(明治41)年4月1日より私立九州薬学校と改称された。これは、単に熊本のみならず九州の薬学教育機関となってきたので、名実相伴わせるために改称されたものである。この年の3月には現所在地の飽託郡大江村字九品寺78番地に敷地3,900余坪(約10,300㎡)を買収し、新校舎建設が直ちに着工された。1909(明治42)年12月に竣工した新校舎は、18棟総建坪700坪(約2,300㎡)の面目を一新する外観で、これが後の熊本大学薬学部にとっての最初の学舎となった。

1910(明治43)年1月21日付をもって薬学専門学校の設立が認可され、同年4月1日に私立では最初の「私立九州薬学専門学校」が誕生した。日本薬学会は本校の薬学専門学校への昇格を祝福する意味も兼ねて、同年4月4日、5日の両日に熊本の地で総会を開催した。

1912(明治45)年、飽託郡大江村九品寺188番地を買い入れ、ここに2階建1棟103坪、平家建1棟40坪、その他附属舎10棟148坪、計12棟291坪の寄宿舎を建築し、生徒100名収容の設備とした。また、文部省視学官の視察の後、本校本科卒業生は無試験で薬剤師免許証を下付されることとなった。

1913(大正2)年4月2日、別科第49回生23名が卒業した。4月8日文部大臣より本科卒業生が私立九州薬学専門学校薬学士を称する件が認可された。

1918(大正7)年10月2日、本校講堂に若狭万次郎教諭を招いて発表会兼練習が行われ校歌が誕生した。

1919(大正8)年6月、文部省より自然科学研究費として篠崎憲一郎教授に300円が補助された。本校職員に文部省科学研究費の補助があったのはこれが最初であった。9月9日文部省令第24号に基づき校名中「私立」の2字を削除した。10月23日には本校講堂で同窓会蘇杏会の発会式を行い、引き続き九州連合薬剤師大会が举行された。1920(大正9)年12月7日には、第1回九州薬学会を本校講堂で開催した。これは九州薬学会の発足であり、学術面においても本校が着々と地歩を築きつつあったことを示している。

#### 4 熊本薬学専門学校

九州薬学専門学校は、1922(大正11)年4月正式に官立移管願を提出した。1925(大正14)年1月31日の勅令第6号をもって文部省直轄学校となり、同年4月1日熊本薬学専門学校として開校した。初代校長は熊本薬学校校長・九州薬学専門学校校長であった安香堯行氏が引き継ぎ、教授定員4名を12名に、助教授2名を4名に、書記2名を5名に改正した。

一方、同学校の資金繰りを支えてきた九州薬学専門学校財団法人は1931(昭和6)年7月29日に一切の整理を終え、解散した。思えば1910(明治43)年以来30有余年、困苦欠亡の中に苦闘を続けてきた栄光ある本校財団もようやくその任を終えて無事解散することとなった。この功績を録して、薬業組合記功碑が建立された。

官立移管の草創期を経て、熊本薬学専門学校は1928(昭和3)年に至る設備充実時代に入ることになる。新実験室等多くの施設が次々と竣工する中、不幸にも1927(昭和2)年4月13日失火事件が起こった。九州薬学校以来、託摩原頭にそびえ立った旧本館は一朝にして灰燼に帰し、図書室、武道場等も運命をともにしてしまった。復興も当然行わなければならないが、容易なことではなかった。安香校長は直ちに上京して当局と復興の交渉にあたった。しかし、1928(昭和3)年1月5日午前0時10分、安香校長は市内九品寺の自宅で逝去した。新築復興の日を夢みて東奔西走した安香校長の長逝をみたのは関係者一同の痛惜とするところであった。安香



写真1 熊本県薬業組合記功碑  
1989年、柴田学部長の尽力により薬業組合記功碑の改修・移築が行われた。

校長の訃報は瞬く間に全国に広がり、1月6日日本薬学会は薬学教育者としての功労を讃え、名誉会員に推薦した。今では当時校長が植えた樟の若苗が大樹に成長し、学舎を囲み威厳を与えている。その後を継ぐ形で、1928(昭和3)年2月27日、村山義温氏が2代目校長に就任した。

1928(昭和3)年10月27日、故安香校長胸像除幕式、新築校舎の落成式が行われた。新校舎の落成式は、官立移管祝賀を兼ねて挙行された。新築落成式は、当初1927(昭和2)年秋に行われる予定であったが、前述したごとく失火のために校舎の一部を焼失し、その復旧に約1年の歳月を要したためにこの日の祝典となった。

1931(昭和6)年熊本県下で陸軍特別大演習が行われたが、その後天皇は本校に行幸され生徒の実験を御覧になられた。本校ではこの日を記念して1935(昭和10)年5月1日本校構内に行幸記念碑が建立された。また御親閲に参列する準備として、9月16日、本校では校旗の推戴式を行った。1935(昭和10)年1月12日、鉄筋コンクリート平家建1棟45坪の製薬工場が竣工した。同年10月26日、本校の創立50周年、専門学校昇格25周年、官立移管10周年記念及び祝賀会が盛大に行われた。1937(昭和12)年5月10日、製薬工場汽缶室鉄筋コンクリート平家建18坪の製薬工場汽缶室並びに煙突煙道・貯炭場・石炭計量装置・揚水装置・貯水槽等の付帯工事全部が竣工した。1938(昭和13)年2月12日、職員生徒一同は藤崎宮加藤神社招魂社に参拝し、皇軍の武道長久を祈った。これより戦争終了まで毎年祈願参拝が行われた。同年6月10日午前3時全校非常召集演習を行った。これより戦争終了までしばしば非常召集が行われた。9月1日集団勤労作業が始まった。これが事変下における本校としての初めての集団勤労作業であった。11月5日、6日校内開放が行われた。しかし6日、盛会のうちに閉会する直前に本校名物の7色の煙幕実演が工場南庭で行われた際、江口宣明助手により点火された最後の発煙筒が爆発し参観者中2名が即死、2名重傷、数名軽傷という大事故が発生した。この不幸な事件のため江口助手は業務上過失傷害罪で起訴されたのみでなく、やがて鶴飼貞二、村山両教授を本校より失う遠因となった。1940(昭和15)年12月、紀元節2600年記念事業として標本室の設置、国旗掲揚台が竣工した。しかしこれらは現存しない。

1942(昭和17)年3月31日、第2代校長村山義温氏が退職し、同日付をもって藤田穆教授が第3代校長に任命された。1945(昭和20)年、全国に先駆けて熊本薬学専門学校に製薬学科の増設が実現した。しかし一方では、戦時中の学徒動員が相次いで行われ、本校の学業はほとんど停止の状況にあった。戦火は本校にも及び、1945(昭和20)年7月1日、空襲により実験室6棟は附属建物とともに灰燼に帰した。当時器具薬品の市外西里村への疎開が計画されていたが、それに間に合わなかったことが惜しまれた。その状況は当時文部省に報告された罹災調査書により知ることができる。

1945(昭和20)年8月15日終戦を迎えた。本校の本館・講堂・教室等は無事であったが、実験棟の大半は焼失していた。幸いにも図書館は残っており、西日本一を誇ったバックナンバーは失われずに健在であった。やがて米軍勸奨の六・三制の当然の帰結として大学昇格の問題が起こった。当初、総合大学の誘致にあたり熊本県民の熱意は高く燃え上ったが、その先頭に立って東奔西走したのは本校生徒であった。しかし大学は各県に少なくとも1校ずつ設置されることになり、誘致運動は収まった。

1946(昭和21)年4月より男女共学制が実施され、この年2名女子生徒が入学した。同

年5月25日熊本薬学専門学校復興期成会が組織され、戦災復興に力を注ぐことになった。戦災で焼失した建物及び製造薬学科新設に伴う建物新営のための費用は、当時の復興調書に見られるように総計3,607万5,000円であった。

1949(昭和24)年3月10日薬品分析学教室1棟172.5坪が竣工した。同年5月31日法律第150号により国立学校設置法が施行され、これにより熊本大学が設立された。本校は薬学部として熊本大学に包含され、初代薬学部長は藤田穆専門学校長が引き継いだ。薬学部は2学科9講座(1兼任)から構成された。一方、薬学専門学校生徒の在学する期間は熊本大学熊本薬学専門学校と呼ばれることになり、在学生のすべてが卒業する1951(昭和26)年3月31日を限りに自然廃校されることになった。こうして、1951年3月10日熊本薬学専門学校第39回卒業式が薬学部講堂で挙行され、専門学校最後の卒業生139名(厚生薬学科101名・製造薬学科38名)が送り出された。同日謝恩会が催された。翌3月11日には講堂において熊本薬学専門学校課程の終了式が挙行された。そして同年3月31日、法律第84号により、開校以来3,232名の卒業生を輩出した熊本薬学専門学校は廃止された。

## 第2項 薬学部開設から薬科学科に改組

### 1 熊本大学薬学部の開設

熊本薬学専門学校は当初から1学部として包含されることを要望したが、設置準備委員会における協議の段階で、一時医学部内の1学科とする意見が大勢を占める時期があった。この強い空気に反発した本薬学は急ぎ同窓会と呼応して緊急総会を開催し、「薬学専門学校は薬学単独の学部として昇格し総合大学に参画することを期す。若し然らざるときは他学部の1学科たらしめんとするよりは寧ろ薬学の単科大学として昇格を期す」との毅然たる趣旨宣言を発して決意を表明した。発足時の熊本大学の構成は次の通りで、同窓会を巻き込んだ運動の結果、薬学専門学校は薬学部となった。なお、1949(昭和24)年9月1日、熊本大学最初の入学式が理学部講堂で挙行された。

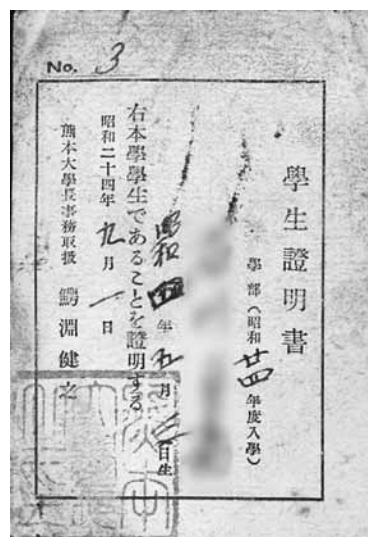


写真2 学生証明書(1949年)

表2 熊本大学開学時の学部と前組織

国立大学の名称	位置	学部名	学校教育法第98号の規定による学校で包括されるもの
熊本大学	熊本県	法文学部	第五高等学校
		教育学部	熊本師範学校、熊本青年師範学校
		理学部	第五高等学校、熊本工業専門学校
		医学部	熊本医科大学
		薬学部	熊本薬学専門学校
		工学部	熊本工業専門学校

## 2 薬学部充実の動向

### (1) 講座の変遷

新制大学誘致にあたり、藤田校長をはじめとする熊本薬学専門学校の構想は薬剤学科、製薬学科及び衛生化学科の3学科15講座をもつ薬学部として熊本大学に参加することであったが、文部省の受け入れるところとはならなかった。

新制大学の発足にあたって本学部は薬剤学科と製薬学科の2学科9講座の編成をもって開講した。組織は表3の通りである。

表3 薬学部開設時の学科と講座

学科名	講座名
薬剤学科	生薬学 衛生化学 薬剤学 生薬化学
製薬学科	薬化学 薬品分析学 製薬学第一 製薬学第二 薬効学

より高度な知識技能に対する地域社会の切望に応え、1954(昭和29)年熊本大学薬学専攻科(定員7名)が設置され、第1回生として3名が入学した。同年2月25日、『Kumamoto Pharmaceutical Bulletin』第1巻が発行された。これまで学報としては校友会発行の学術論文集が50周年記念号までに3号、その後、1949(昭和24)年に部内研究誌『薬学集談』を第1巻8号、1952(昭和27)年第2巻6号、1953(昭和28)年第3巻5号まで発行してきたが、同窓有志の経済的援助を仰いで面目一新し、欧文誌刊行に踏み切り毎年発行することになった。しかしその後、1970(昭和45)年6月24日、欧文誌『Kumamoto Pharmaceutical Bulletin』の刊行継続について異議が提案され、10月14日以降発行を停止することが決定された。初版発行以来、1966(昭和41)年8月20日発行の第7巻を最後に廃刊となった。

1960(昭和35)年10月22日、第15回国民体育大会が本県で開催されるに際し、天皇皇后両陛下が本学に行幸され、図書館において加瀬佳年助教授は鎮咳薬の研究について御前講演を行った。同年11月3日、安香堯行校長は熊本県近代文化功労者として表彰された。また、この年は私立熊本薬学が創立されて以来75周年にあたるため、当時薬学部長であった加来天民教授を会長とし、藤田穆及び宗定哲二両名誉教授を顧問とする「熊本創立75周年記念事業会」が同窓生及び教職員により組織された。同年3月5日に発足した事業会は早速実働に移り、同年4月には全国の同窓生に趣意書を発送した。募金目標額100万円、事業計画としては、①75年沿革史、②安香堯行先生の功績顕彰、③旧職員、同窓生の動静並びに業績調査、④薬学部施設及び図書の充実、整備等であった。

1961(昭和36)年11月薬効学講座は、薬物学講座に改称された。1964(昭和39)年、製薬学第1及び製薬学第2は講座名をそれぞれ薬品製造化学及び薬品製造工学に改称された。1965(昭和40)年4月1日には生化学講座が新設され、久保田幸穂教授が就任した。1966(昭和41)年7月生薬化学講座と生薬学講座が統合され、薬品物理化学が設置された。改称新講座には大阪大学から村上英夫助教授が着任した。これと同時に生薬化学講座は生薬学講座に包括された。1969(昭和44)年4月1日放射薬品学講座が新設され、同年10月1日日本大学理工学部薬学科より杉井篤教授が着任、北原一太助教授とともに、附設放射性同位元素総合研究施設を駆使しての研究、教育が開始された。1971(昭和46)年3月22日には「生物薬品製造学」講座が新設され、武田薬品工業研究所から柴田元雄教授が、九州大学農学部から上田勝助教授が就任した。更に1973(昭和48)年6月30日薬剤学講座が新設



された。担当は一番ヶ瀬尚薬剤学教授が兼任し、名古屋市立大学から上釜兼人助教授が迎えられた。また、この間の1964(昭和39)年度に薬学研究科修士課程「薬剤学」及び「製薬学」専攻が設置され、薬学に関する教育研究の内容は大きく整備充実された。

このような新講座増設が行われ、1973(昭和48)年6月には従来の薬剤及び製薬2学科の講座編成は表4のように改編され、13講座体制となった。

表4 1973年当時の学科と講座

学科名	講座名
薬剤学科	薬化学 薬品分析学 生薬学 衛生化学 薬剤学 薬物学 生化学
製薬学科	薬品物理化学 薬品製造化学 薬品製造工学 放射薬品学 生物薬品製造学 製剤学

なお、熊本大学では教養部において1970(昭和45)年度から総合科目が開講され、その「医学概論」に林清五郎教授が薬学史と社会における薬学について分担講義をした。薬学部では1981(昭和56)年度から総合科目として「薬の科学」を開設した。なお、「薬の科学」は教養科目の学際科目へと形を変え2010(平成22)年度までは授業が実施されている。

### 3 研究棟・施設の整備と記念碑の建立

熊本大学薬学部は、組織人事の上でその基礎を固め充実を図るとともに戦災により焼失した建物の復興への努力を続け、次第に整備発展していった。1950(昭和25)年9月22日、既設木造2階建講義棟(1928年3月20日建築)を改造した生薬学教室200坪が竣工した。1951(昭和26)年1月31日には、木造平家建築効学教室215坪、薬品分析学教室214坪が竣工し、3月末日には衛生化学教室325坪が完工した。1952(昭和27)年11月14日、木造平家建旧校舎(1909年9月25日建築)177坪を改造した生薬化学教室、製薬学第1教室が竣工した。ただし、その付帯工事は翌1953(昭和28)年3月30日に完成した。

戦後の混乱した世情がようやく平静を取り戻すにつれて、戦時中に抛出され構内に台座のみを晒らしていた安香校長の胸像を再建しようという機運が学部内同窓の間で高まり、上野景治氏を委員長に募金を行った。こうした学部同窓関係者一体となった協力によって胸像が原型より再建された。本胸像は在熊彫刻家、田島亀彦氏渾身の傑作である。1952(昭和27)年12月6日除幕式が行われ、樟の大樹の下、旧礎石の台座に再び収められた先生の温容が姿を現した。台座の銘は藤田穆学部長によって記された。

1953(昭和28)年6月26日、熊本市の中心部を縦断して流れている白川が氾濫し、未曾有の大水害を被った。薬学部は校舎の被害は僅少であったが、薬草園は潰滅的な打撃を受けた。水害後、校地東部の低地に排土を集め平坦地とした。10月26日には水難学生の慰霊祭が大講堂において催された。1954(昭和29)年12月15日、旧柔剣道場の解体移改築工事が完成して薬剤学教室81坪ができあがった。1956(昭和31)年12月2日、自家給水装置新設工事が竣工した。1958(昭和33)年8月、薬化学教室模様替工事が実施された。翌年9月20日には、衛生化学教室の外装モルタル塗装工事が施された。1960(昭和35)年9月、熊大10周年記念行事の一部として、旧弓道場を食堂として使用する改装工事が竣工した。1963(昭和38)年3月29日、放射性同位元素実験室の鉄筋コンクリート1階建63㎡が完工した。1964(昭和39)年5月20日、事務局より省庁別宿舍建設予定地として薬草園圃場の

一部2,381.12㎡の転用の申し入れがあり、学部はこれを承認した。同年11月、新実験研究棟1棟建設に先駆けて記念館を校地南西隅に移転改装した。1965(昭和40)年3月25日、実験研究棟A棟西側半分の鉄筋コンクリート4階建2,019㎡が竣工し、生薬学(1階)・生薬化学(1階)・衛生化学(2階)・薬品製造工学(3階)・薬品分析学(4階)の各教室が入棟することになった。同年3月30日、白山町公務員宿舎の木造平家建2戸91㎡、鉄筋コンクリート3階建986㎡が竣工したが、その後、平屋2戸は解体された。従来、構内北面に正門が位置していたが、1966(昭和41)年に南面を正面とする構内の環境配備構想が立てられた。この構想に基づき、安香校長の胸像が南西隅の記念館横に移転され、周辺の造園植樹が行われた。1966(昭和41)年3月15日、実験研究棟A棟東側半分の鉄筋4階建1,963㎡が竣工し、管理部門(1階)と薬剤学(2階)・薬品製造化学(3階)・薬化学(4階)の各教室が入棟し、A棟が完成した。1967(昭和42)年3月2日、植物温室の鉄骨木造タキロン二重張59㎡が竣工した。同年3月31日、実験研究棟B棟の鉄筋コンクリート4階建3,982㎡、C棟の鉄筋コンクリート2階建1,420㎡が竣工し、管理部門・講義室・図書館・生化学教室・薬物学教室が入棟した。1970(昭和45)年3月25日、実験研究棟C棟の鉄筋3階建1,113㎡が竣工し、生物薬品製造学教室と放射薬品学教室が入棟した。同時に講義棟499㎡が完工した。1974(昭和49)年12月20日、薬草園管理舎の鉄筋コンクリート造98㎡が竣工した。1977(昭和52)年3月25日、実験研究棟D棟の鉄筋3階建627㎡が竣工し、製剤学教室と分析センターが入棟した。同時に実験動物舎の鉄筋2階建207㎡が竣工した。1979(昭和54)年3月28日既設の薬用植物園温室が老朽化破損して機能なくなり、新たに最新の機能を備えた温室65㎡が園内に完成した。

元熊本薬学専門学校校長村山義温氏の逝去(1980年5月22日)に際して遺族から寄贈された多額の香典返しを基金にして、村山義温校長記念碑設立事業に着手し、多数の門下生の協力を得て1981(昭和56)年10月記念像が完成した。同日、薬学部正門大樟の前において多数の門下生と本学教職員参列のもと、除幕式典が執り行われた。記念像は赤御影石を台座にブロンズのレリーフ像をはめ込み、裏面には先生御自筆の書「花看半開 酒飲微酔」と碑文を刻んだ芸術性の高い作品で、彫刻家石原昌一氏(熊本大学教育学部教授)の傑作である。1983(昭和58)年3月25日、薬学部体育館の鉄骨鉄筋コンクリート造平家建1,071㎡が竣工した。第1体育室及び第2体育室からなり、式典や講演会等多目的に使用することが可能で、熊薬百周年の際には記念講演会会場として使用された。1984(昭和59)年3月25日には、鉄筋コンクリート2階建273㎡の放射性同位元素実験棟が、旧施設の東側に新築竣工した。以上のようにして薬学部の研究棟、施設は整備されていった。

#### 4 薬科学科への改組

1985(昭和60)年度には本懐であった博士課程(薬学研究科医療薬科専攻1専攻)の設置が認められた。これに伴い、学部の教育・研究を新しい研究科に相関させ、教育・研究を効果的に行うため、従来の2学科制(薬剤学科・製薬学科)を1学科制(薬科学科)とし、関連する講座を統合して大講座制(13講座を4大講座)とする改編が行われた。

1985(昭和60)年度学部入学生より新カリキュラムに基づく専門教育が開始され、薬科学全般にわたる教育研究の第一歩を踏み出した。

表5 1985年当時の大講座名と研究室

講座名	基幹となる研究室名			
医療薬剤学	薬剤学	製剤学		
薬物活性学	薬物学	薬品物理化学	生物薬品製造学	
衛生薬学	衛生化学	薬品分析学	放射薬品学	生化学
薬品資源学	生薬学	薬化学	薬品製造化学	薬品製造工学

表6 1985年当時の教育科目

■専門教科目					(1985年4月1日施行)				
講座名	授業科目	授業時間数	単 位		講座名	授業科目	授業時間数	単 位	
			必修	選択				必修	選択
医療 薬 剤 学	薬剤学Ⅰ	30	2		衛生 薬 学	機器分析学	30		2
	薬剤学Ⅱ	30		2		生物化学	30	2	
	薬局方概論	30	2			生理化学	30	2	
	製剤学Ⅰ	30	2			病態生化学	15		1
	製剤学Ⅱ	30		2		臨床生化学	15		1
	品質管理學	15		1	衛生薬学実習	180	4		
	化粧品製剤学	15		1	薬品 資 源 学	生薬学Ⅰ	30	2	
	臨床薬学	30	2			生薬学Ⅱ	30		2
	病院薬学	15		1		漢方概論	15		1
	医薬品情報学	15		1		有機化学	60	4	
医療薬剤学実習	135	2	1	錯体化学		30		2	
薬物 活 性 学	薬物学	60	4			医学品化学Ⅰ	30	2	
	毒性薬理学	15		1		医学品化学Ⅱ	30		2
	薬品物理化学	30	2			有機合成化学	30		2
	物理化学	30		2		薬物設計学	30	2	
	微生物化学	30	2			情報処理学	30		2
	微生物学	30		2	薬品資源学実習	180	4		
	微生物薬品学	30		2	講 座 外	薬事及衛生法規	30	2	
	生物学的製剤学	15		1		薬学概論	30		2
薬物活性学実習	135	3		病理学		15		1	
衛 生 薬 学	衛生化学	60	4			科学英語	15		1
	公衆衛生学	30		2		免疫学	15		1
	裁判化学	15		1	遺伝子操作学	15		1	
	薬品分析学	60	4		特別学習	15		1	
	有機分析学	30		2	特別実習	360	8		
放射化学	30	2		計	2,280	63	45		
放射薬品学	30		2						

## ■基礎教育科目

授業科目	授業時間数	単 位	
		必修	選択
化学概論 演習Ⅰ	30	1	
化学概論 演習Ⅱ	30	1	
化学概論 演習Ⅲ	30	1	
化学概論 演習Ⅳ	30	1	
植物学	60	4	
基礎医学	60	4	
計	240	12	

表7 1985年当時の薬学部教員一覧

1985年4月1日現在

学科	講座	研究室	教授	助教授	講師	助手	教務員
薬科学科	医療薬剤学	薬剤学 製剤学	小田切優樹 上釜 兼人	今村 順茂 平山 文俊		末永 綾香 入江 徹美	今井 輝子
	薬物活性学	薬物学 薬品物理化学 生物薬品製造学	宮田 健 村上 英夫 柴田 元雄	上田 勝	岡野 善郎 森 弘正	高濱 和夫 山本 典恵 城戸 裕	安永久美子 鈴木啓太郎
	衛生薬学	衛生化学 薬品分析学 放射薬品学 生化学	児島 昭次 合屋周次郎 杉井 篤 久保田幸穂	中川 満夫 高館 明 小川 尚武 庄司 省三		浄住 護雄 藤野 博之 原田久美子 船越 崇行	本田 俊哉 入倉 充
	薬品資源学	生薬学 薬化学 薬品製造化学 薬品製造工学	野原 稔弘 国枝 武久 古川 潮 久野 拓造	矢原 正治 佐久間義治 大川原 正 原野 一誠		金城 順英 永松 朝文 山崎 哲朗 松岡 俊和	石塚 忠男
薬用植物園						浜田 善利	

日本薬学会は創立百周年を迎えた直後、薬学第2世紀の幕開けとなる第101年会を、1981(昭和56)年4月2～4日の3日間の日程で、加瀬佳年組織委員長(熊本大学薬学部長)のもと、熊本大学黒髪キャンパスを主会場にして、熊本市市民会館・熊本市産業文化会館・熊本郵便貯金会館・熊本県福祉会館などで開催した。

本年会への参加者は7,000名を超え、このように大規模な学会を熊本の地で開催するのは初めてのことであった。第101年会の特別講演では、統一テーマとして特に「生命科学を指向して」という標題を掲げ、生命科学の中でも薬学に関係の深い「免疫」「がん」「酵素」の3つを柱とした。特別講演の演者には、ノーベル賞候補者を含む一流の学者14名が内外から招聘された。ほかに、日本薬学会会頭講演、日本薬学会賞等の受賞者講演が行われた。薬学会の会員間の親睦を深めるための懇親会及びミキサーは、恒例に従い催され、熊本ホテルキャッスルの懇親会場には約500名が参加した。この席には、沢田一精熊本県知事、星子敏雄熊本市長、松山公一熊本大学学長など多数の来賓が出席し、特別講演者を代表してR. Huisgen博士が祝辞を述べた。ミキサーは黒髪地区北食堂で開催され、若手研究者の熱気であふれた。2年余の準備期間中、組織委員会により、年会の運営方法、宿泊施設

の確保などについて十分な検討がなされた。プログラム編成、会場の設営並びに運営は、薬学部教職員を中心として、熊本県病院薬剤師会のメンバーや薬学会九州支部の諸氏の全面的な協力を得て行われた。また、薬学部学生は総動員体制をとり協力した。講演要旨集の写真に見られる第101年会のシンボルマークは、阿蘇山の噴火をデザイン化したもので、加瀬組織委



写真3 日本薬学会 第101年会

員長の作によるものである。

以上のように、第2世紀の幕明けともいえる第101年会は、地方における学会開催の指針となる学会として、大いに注目され、成功裡に閉会した。

### 第3項 薬科学科への改組から部局化・法人化まで

#### 1 熊薬創立百周年を迎えて

1985(昭和60)年、熊薬草創から満百周年の記念事業が挙行された。この1世紀の間に実に7,500余名に及ぶ有為の人材を世に送り出した。

1983(昭和58)年7月13日の薬学部教授会において百周年記念事業の実施を決定し、直ちに「熊薬百周年記念事業準備委員会」が設立され、委員長に柴田元雄教授、委員児島昭次、古川潮、宮田健の各教授及び庄司省三助教授によって百周年に関する具体的構想の検討が繰り返され、熊薬百周年記念事業全組織、記念事業及び記念行事に関する案が作成された。1983(昭和58)年9月30日熊薬同窓会評議員会で上記案件について審議され、更に同年10月22日山口市で開催された熊薬同窓会総会で承認され、「熊薬百周年記念事業会」が発足した。また、熊薬百周年の記念事業の実施にあたり「熊薬百周年記念事業後援会」が設立された。会長に小島政夫氏(昭和11年卒、山之内製薬株式会社前会長)が就任し、記念事業のための資金として5,000万円の募金目標を基礎として事業計画が立案された。

#### (1) 熊薬百周年記念事業会組織

表8 熊薬百周年記念事業会組織

役職	氏名	役職	氏名
名誉会長	松山 公一(学長)	式典委員長	児島 昭次
会長	久野 拓造(薬学部長)	記念講演委員長	杉井 篤
副会長	久保田幸穂	記念祭(学内開放)委員長	上釜 兼人
庶務委員長	柴田 元雄	祝賀会委員長	野原 稔弘
会計委員長	今村 順茂	記念碑・資料保存委員長	古川 潮
渉外委員長	吉川 利善	百年史資料収集・企画・編集委員長	児島 昭次
広報委員長	合屋周次郎	募金企画活動委員長	古川 潮

#### (2) 熊薬百周年記念事業後援会組織

この事業の挙行に際して、熊薬百周年記念事業会会長に久野拓造薬学部長が就任し、百周年記念事業資金募金趣意書が熊薬百周年記念事業後援会の小島会長名で作成され、1984(昭和59)年8月全国の同窓生並びに在校生父兄に発送された。

なお、百周年記念事業の詳細は以下の通りである。

表9 熊薬百周年記念事業後援会組織

役職	氏名
会長	小島政夫
副会長	山内 元

### (3) 熊薬百周年記念事業

表10 熊薬百周年記念事業

事業内容
百周年記念ホール新築、記念館改修、百年史編纂

### (4) 熊薬百周年記念行事

1. 記念式典 (1985年11月2日午前11時、熊本ホテルキャッスル)
1. 記念祝賀会 (1985年11月2日午後1時30分、熊本ホテルキャッスル)
1. 記念講演 (1985年11月3日、薬学部体育館)
1. 記念祭 (1985年11月3日、学内開放)
1. 記念植樹 (1985年11月3日)

熊薬百周年記念講演会は、ノーベル化学賞受賞者であり、当時の京都工芸繊維大学長である福井謙一先生を迎え、「化学とともに40年」という演題で開催された。当日は天候にも恵まれて早朝から招待者・同窓生・教職員・在校生・その他約800名の聴衆が集まり、広い体育館も熱気に包まれ、会場に用意された座席でも不足するといった盛況であった。入場できなかった方には、ビデオカメラで撮影した講演会会場の模様を薬学部第1講義室に放映して見てもらうといった方法もとられた。

熊薬百周年記念事業の最大事業は、熊薬百周年を後世に末永く記念すべく計画された、記念ホールの新築にあった。1985(昭和60)年1月7日の設計発注に始まり、4月初旬に最終的な設計図(資料展示室・資料保存室・準備室・玄関・洗面所・廊下など延べ面積165㎡)が完成した。また、建築場所も熊薬五十周年記念に建築された記念館の東隣りに決まった。起工式(地鎮祭)は、6月8日に久野拓造薬学部長・記念事業会会長、正木茂薬学部事務長らが出席して行われ、本格的な工事が開始される運びとなった。工事の各段階で

は、本学施設部及び建設業者自身による厳しい検査や証拠写真の撮影が行われるなど、きめ細かな工事が続き、10月15日、熊薬百周年記念事業後援会に引き渡された。完成した記念ホールの特徴は、平家建てであることから建物全体の落ち着きや豪華さを考慮し、建物全体の天井を可能な限り高くしたことであり、資料展示室と資料保存室の窓枠は、中世ヨーロッパ様式を取り入れた。



写真4 熊薬百周年記念講演会

### (5) 熊薬百周年記念ホール

熊薬百周年記念ホールの概要は次の通りである。

総工費：約4,600万円、総延べ面積：165㎡、構造：鉄筋コンクリート平家建て、総部

屋数：3部屋、資料展示室：80㎡、資料保存室：40㎡、準備室：11.5㎡、起工：1985（昭和60）年6月8日、竣工：1985（昭和60）年10月15日

熊薬百周年記念ホールの開所式は、1985（昭和60）年11月3日の記念講演会終了後、記念ホール玄関前にテントを張った特設会場で行われた。記念ホール開所式の終了後、藤田穆氏（熊本薬学専門学校第3代校長・熊本大学初代薬学部長）の胸像除幕式が挙行された。ブロンズ製の胸像は、現在記念ホール内の熊薬ミュージアムに設置されている。なお、五十周年記念館は1935（昭和10）年に設立されたものだが、50年間の長期にわたる使用にも耐えてきただけに、その老朽化がかなり進んでいた。そこで、熊薬百周年記念事業後援会では、百周年記念事業の一環として、記念館の改修工事を総工費約400万円をかけて行った。五十周年記念館は老朽化及び宮本記念館の新築のため、惜しまれつつ2004（平成16）年に解体された。

記念ホールの開所式終了後には、記念植樹が挙行された。記念樹に「ニッケイ」を選んだ理由として「薬学にとって馴染み深く、使用範囲の広い植物である」という話を盛り込んだ杉井篤熊本大学教授の挨拶があった。11月3日の記念講演会、記念ホール開所式、記念植樹及び胸像除幕式などの記念行事終了後、学内開放が実施された。午後12時30分から3時まで記念ホール、記念館のほか、各研究室・図書館・分析センター・RI研究室・薬用植物園・動物舎・ガラス工作室などを記念祭への参加者に開放し、学内の様子も見学してもらった。また、B棟2階では「化学マイコン」の展示と実演も行われた。

熊薬創立百周年を迎えるにあたりその記念事業の一環として、熊薬百年間の変遷と発展の足跡を『熊薬百年史』として編集し刊行した。本百年史は1960（昭和35）年に発刊された『熊薬七十五年史抄』以来の熊薬の歴史を綴る史料である。1984（昭和59）年2月6日熊薬百年史編集委員会が開催され、編集方針として七十五年史抄を基礎とし、『熊本大学三十年史』（1980年刊行）も参考にすること、特に七十五年史以後の変革、拡張、充実に焦点を置き、熊本大学薬学部の変遷を加えることが企画され、その内容が決定された。同年3月7日執筆委嘱、原稿依頼、同年12月原稿締切、1986（昭和61）年3月完成をみた。



写真5 百周年記念ホールと熊薬五十周年記念館  
左が百周年記念ホール、右が熊薬五十周年記念館

## （6）百周年記念事業後

1991（平成3）年、薬学部では新しい形での国際協力が開始された。国際協力事業団の資金的なバックアップにより、発展途上国の関係技術者を熊本に招き、「医薬品の効果判定」というテーマでセミナーが始まった。国際保健医療交流センターとの共催であるが、セミナーの内容は薬学部に一任され、多くの先生方の協力により、実施に漕ぎつけることができた。国立大学薬学部はもとより熊本大学でも初めての企画であり、担当の教員には大変な苦勞があった。



写真6 医薬品の効果判定セミナー（1991年）

1991（平成3）年6月3日、雲仙普賢岳にて大火砕流が発生し、本学にも火山灰が降り注いだ。また、同年9月27日、台風19号が未曾有の被害を熊本地方にもたらした。大江キャンパスでは30本の倒木があり、倒木による車両の全壊に加え、動物舎などにも被害をもたらした。しかし、教職員はじめ、学生の協力もあり、いち早く復旧し、大きな支障もなく教育、研究を続

けることができた。

1993（平成5）年の大学設置基準の大幅な改正は、教育課程を含めた大学のあり方に対して抜本的な変革を求めるものであった。これを受けて、薬学部内でも学部4年一貫教育へ向けた検討が続けられ、一般教育等も含めた大幅なカリキュラムの変更が必要とされた。これとともに大学院の充実、発展を念頭に置いた将来計画の策定も進められた。一方、自己点検、評価については、各部局の動きが活発になってきており、薬学部でもこのための資料を収集し冊子にまとめ上げる作業に取りかかった。本冊子には薬学部及び薬学研究科の概要及び過去3年間の研究、教育活動のほか、社会との関連等が収録されることとなった。



写真7 台風19号被害（1991年）

## 2 部局化・法人化へ向けて

1997（平成9）年の橋本内閣における、行政改革や財政構造改革などのいわゆる「六大改革」の1つとして、教育改革が政府の最重要課題に位置づけられた。その主な理由は、我々が将来に夢や目標を抱き、創造性とチャレンジ精神を存分に発揮できる社会を作るためには、あらゆる社会システムの基盤である「教育」を改革する必要があるという視点からであった。薬学教育では、“薬”という人命に関わる物質を扱うため、医療人としてのモラルや使命感の醸成が重要であり、生命を尊重する心、他者を尊重する心、思いやり、正義感、公正さ、倫理観などの「心」の問題を考えながら、創造性や国際性を身につけ、生涯にわたりその能力を最大限発揮するような、意欲に満ちた人材を育成する必要がある。

更に、1999（平成11）年4月の時点で、薬学部を有する14の国立大学のうち、旧制6大学（東京・京都・大阪・北海道・東北・九州）すべてで大学院重点化が行われ、組織の主体が



学部から大学院薬学研究科に移行した。そのような大学院大学では、研究者の養成に主眼が置かれ、学部は大学院における高度な教育研究に必要な基礎学力の養成に専念する方向に進むこととなった。一方、新制8大学では、岡山・金沢・徳島・千葉・熊本・広島・長崎・富山医薬大の順に臨床(又は医療)薬学専攻が整備され、高度職能人養成のための基盤が強化された。このように国立大学の規模や機能に応じて、役割分担が徐々に明確になり、大学改革がひとつの節目を迎えた感があった。一方、省庁再編に伴う行政スリム化で焦点となっていた国立大学の独立行政法人化の問題は、2003(平成15)年まで結論が先送りされたが、その間に、組織・教育研究活動・社会との連携などあらゆる角度から自己点検・評価や学部評価が実施され、101校ある国立大学の序列化や統合が急ピッチで進んだ。

その間薬学部では、1999(平成11)年、部内の教育研究体制検討委員会の協力のもと、国内外の有識者からなる評価委員(日本人5名・外国人2名)による教育研究実態の診断と検証を仰ぐことになった。学部・大学院全般にわたる運営体制・教育活動・研究活動・学術交流と社会的活動の4項目について、総じて高水準の評価を得るとともに、示唆に富む提言や改善すべき課題などが提示された。その結果は、和文と英文の外部評価報告書にまとめて公表された。

一方、薬学教育改革に関する国家的議論もこの頃開始された。1999(平成11)年、文部省・厚生省の担当官、日本薬剤師会代表、日本病院薬剤師会代表からなる薬学教育に関する懇談会、いわゆる四者懇に、更に私立薬科大学協会学長協議会代表と国公立大学薬学部長会議代表を加えた「六者懇」が発足し、6年制問題等に関する議論が開始された。6年制問題に対する国公立大学薬学部としての当面の意見は、4+2案(学部4年+大学院修士課程2年)が主流を占めたが、実務実習の期間、薬剤師免許の種類、薬剤師国家試験の改善等に関する課題が山積し、当分は目を離せない状況となった。

1998(平成10)年当時、薬学を取り巻く環境は大きな変革期にあった。例えば、①1992(平成4)年度の医療法の改訂に伴う国家試験の出題基準・内容の変更、②医薬分業の推進等による薬剤師の職務内容の拡充・深化、③薬剤師実務実習の充実、④分子生物学領域の進展に象徴される基礎医学・薬学の著しい発展、⑤新たな感染症や環境問題など薬学が取り組むべき領域の拡大、⑥薬学及び薬剤師活動と密接不可分の情報科学の進展、⑦医療人として倫理観豊かで国際的視野をもった人物の育成、などである。本学部では、1997(平成9)年度から熊本県内外の薬局・病院の全面的な協力を得て、薬学部3年次の薬局実習及び病院実習を必修化しており、特に、薬局実習の必修化は、全国に先駆けた取り組みであったが、これらの諸課題に対応するため、2000(平成12)年度からの教養教育の見直しに連動して、1998(平成10)年春、國枝武久学部長から薬学部カリキュラム改訂の指示が教務委員会(宮田健委員長)に対してなされた。以来、2年にわたる討議を経て、2000(平成12)年度、上釜兼人学部長のもとで画期的な新カリキュラムがスタートした。新カリキュラムの編成にあたっては、薬学部の教育理念・目標である「薬学は医薬を通じて人類の健康に貢献する総合科学であるとの理念のもと、医薬品の創製・生産・管理、環境・保健衛生及び薬剤師の職能等に関わる基礎知識を修得させ、生命科学を基礎とする高度の『薬学的思考力』と倫理感を備えた創造性豊かな人材を育成する」の実現を目指すことになった。

改訂にあたっては、①教育すべき授業科目(内容)をまず厳選し、それを各教官が分担

する、②必然的に増加する授業コマ数を確保し、各授業の目的を学生に明確に示すために、クォーター制（1年を4つの学期に分割）を採用する、という方針が、教務委員会で、次いで教授会で決定された。具体的には、臨床医学基礎から臨床心理学まで薬剤師の職能に関わる10科目以上の科目、分子生物学や生体機能化学などの先端科目、加えて環境薬学などが新規に導入された。また、基礎科目の化学、物理化学、生物学や関連科目については、限られた時間枠の中で、授業内容が重複せず有機的な関連を持ち、かつ時代に即した高度な内容まで進めるように、担当教員により知恵が絞られた。その結果、教養科目を除いた薬学部の主な新カリキュラム講義科目は表11の通りであった。

実習科目についても、従来の研究室ごとに独立した実習方式を見直し、薬学教育に必要な実習は何かについて、有馬英俊助手会会長をはじめとする助手層の教員を中心としたワーキンググループで検討した。その結果、化学系実習は基礎と発展（応用）に分けて関係4研究室で共同実施し、生物系実習は遺伝子から動物個体まで、系統的に配置し、得意な分野を研究室が担当することになった。また新規に、1年次に早期薬学体験学習を、2年次にはコンピュータプログラムを扱う情報科学系実習を、3年次に実務実習のプレ実習としての医療系薬学実習を導入し、他の実習科目も担当の教員により全面的に見直し改善がなされた。早期薬学体験学習は、全国に先駆けて導入され、入学後早い時点で、学生が薬学を学ぶ目的意識と意欲をもてるよう、病院・薬局、企業（久光製薬、化血研、パナファーム・ラボラトリーズ）の研究所・工場、中富記念くすり博物館、保健衛生関係の試験・研究機関、清掃工場などを見学、研修するものである。全国でも早い時期に導入された実務実習は、従来の病院薬剤部（薬剤科）2週間、薬局1週間に薬学部のコンピュータ利用の実務実習1週間を加えた、計4週間の実習が必修として、県内の病院・薬局の薬剤師の協力により1999（平成11）年度から再スタートした。

2001（平成13）年9月、国立大学では2番目、薬学部としては全国初の「環境管理に関する国際規格ISO14001」の認証を取得した。以降、循環型社会の形成、自然環境保全、公害防止、医薬品・毒劇物の安全管理等、環境衛生に配慮した教育研究活動を組織的に推進している。このような取り組みは高く評価され、文部科学省2008（平成20）年度「質の高い大学教育推進プログラム」として、本学部の「エコファーマを担う薬学人育成プログラム」が採択された。

表11 1997年当時の授業科目

■専門基礎科目					■専門科目					
区分	授業科目	授業時間数	単位		区分	授業科目	授業時間数	単位		
			必修	選択				必修	選択	
専門基礎科目	微分積分概論	30	2		衛生薬学・一般薬学	衛生薬学Ⅰ	15	1		
	線形代数概論	30	2			衛生薬学Ⅱ	15		1	
	統計学概論	30	2			衛生薬学Ⅲ	15		1	
	物理学	30	2			環境薬学Ⅰ	15	1		
	情報リテラシーⅠ	15	1			環境薬学Ⅱ	15		1	
	情報リテラシーⅡ	15		1		薬学概論	15		1	
	機能形態学Ⅰ	15	1			薬事・衛生法規Ⅰ	15	1		
	機能形態学Ⅱ	15	1			薬事・衛生法規Ⅱ	15		1	
	機能形態学Ⅲ	15	1			薬局方概論	15		1	
	機能形態学Ⅳ	15		1		薬科学史	15		1	
	計	210	12	2		医薬統計学	15		1	
薬学基礎科目	生化学Ⅰ	15	1		薬学ワークショップ	15		1		
	生化学Ⅱ	15	1		薬学演習Ⅰ	15		1		
	生化学Ⅲ	15	1		薬学演習Ⅱ	15		1		
	生化学Ⅳ	15		1	薬学演習Ⅲ	15		1		
	生化学Ⅴ	15		1	薬学演習Ⅳ	15		1		
	分子生物学Ⅰ	15	1		小計	240	3	13		
	分子生物学Ⅱ	15		1	薬学専門科目	薬理学Ⅰ	15	1		
	微生物化学Ⅰ	15	1			薬理学Ⅱ	15	1		
	微生物化学Ⅱ	15		1		薬理学Ⅲ	15		1	
	微生物化学Ⅲ	15		1		薬理学Ⅳ	15		1	
	微生物化学Ⅳ	15	1			病態生理学Ⅰ	15	1		
	生体機能化学Ⅰ	15		1		病態生理学Ⅱ	15		1	
	生体機能化学Ⅱ	15		1		薬剤学Ⅰ	15	1		
	解剖学概論	15	1			薬剤学Ⅱ	15	1		
	免疫学Ⅰ	15	1			薬剤学Ⅲ	15		1	
	免疫学Ⅱ	15		1		薬剤学Ⅳ	15		1	
	小計	240	8	8		製剤学Ⅰ	15	1		
	有機化学系	有機化学Ⅰ	15	1		製剤学Ⅱ	15	1		
		有機化学Ⅱ	15	1		製剤学Ⅲ	15		1	
		有機化学Ⅲ	15	1		製剤学Ⅳ	15		1	
		有機化学Ⅳ	15	1		医薬品安全性学	15	1		
		有機化学Ⅴ	15	1		小計	225	8	7	
		有機化学Ⅵ	15	1		臨床薬学	医療倫理学	15	1	
		有機化学Ⅶ	15	1			臨床医学基礎Ⅰ	15		1
		有機化学Ⅷ	15	1			臨床医学基礎Ⅱ	15		1
有機化学Ⅸ		15		1	薬物治療学Ⅰ		15	1		
有機化学Ⅹ		15		1	薬物治療学Ⅱ		15		1	
有機化学Ⅺ		15		1	薬物治療学Ⅲ		15		1	
有機化学Ⅻ		15		1	漢方概論		15		1	
有機化学Ⅼ		15		1	医薬品情報管理学Ⅰ		15	1		
有機化学Ⅽ		15		1	医薬品情報管理学Ⅱ		15		1	
有機化学Ⅾ		15		1	臨床心理学		15		1	
生薬学Ⅰ		15	1		臨床検査学		15		1	
生薬学Ⅱ		15	1		看護学	15		1		
生薬学Ⅲ		15		1	臨床経済学	15		1		
生薬学Ⅳ		15		1	薬物処方学	15		1		
小計	255	10	7	臨床薬物動態学	15		1			
物理化学・分析化学系	物理化学Ⅰ	15	1		小計	225	3	12		
	物理化学Ⅱ	15	1		薬学実習科目	薬学体験学習	20	0.5		
	物理化学Ⅲ	15		1		導入実習	20	0.5		
	物理化学Ⅳ	15		1		生物系薬学実習Ⅰ	40	1		
	物理化学Ⅴ	15	1			生物系薬学実習Ⅱ	40	1		
	物理化学Ⅵ	15	1			生物系薬学実習Ⅲ	40	1		
	物理化学Ⅶ	15		1		生物系薬学実習Ⅳ	40	1		
	分析化学Ⅰ	15	1			生物系薬学実習Ⅴ	40	1		
	分析化学Ⅱ	15	1			化学系薬学実習Ⅰ	60	1.5		
	分析化学Ⅲ	15		1		化学系薬学実習Ⅱ	100	2.5		
	分析化学Ⅳ	15		1		物理系薬学実習Ⅰ	40	1		
	分析化学Ⅴ	15	1			物理系薬学実習Ⅱ	40	1		
	分析化学Ⅵ	15	1		物理系薬学実習Ⅲ	40	1			
	分析化学Ⅶ	15		1	物理・生物系薬学実習	40	1			
	放射化学Ⅰ	15	1		情報科学系実習	40	1			
	放射化学Ⅱ	15	1		医療系薬学実習	40	1			
	小計	240	10	6	薬剤師実務実習	80	2			
				特別実習	240	6				
				小計	960	24				
				合計	2,385	66	53			

---

## 第4項 法人化・部局化から現在（4年制・6年制併設）まで

---

### 1 法人化・部局化に伴う薬学部組織の充実

大学の教育研究に対する国民の要請に応えるとともに、我が国の高等教育及び学術研究の水準の向上と均衡ある発展を図るため、国立大学を設置して教育研究を行う国立大学法人の組織及び運営、並びに大学共同利用機関を設置して、大学の共同利用に供する大学共同利用機関法人の組織及び運営について定めることを目的として、2003（平成15）年に国立大学法人法が制定された。制定にあたっては衆議院及び参議院の両院にて「附帯決議」が附された。

本薬学部においても時代に対応すべく、最先端の教育と研究のあり方を求めて改革を重ね、ポストゲノム時代の生命科学研究に対応するため、2003（平成15）年4月より医学系・薬学系の教員スタッフを統合した医学薬学研究部と、薬学教育部及び医学教育部（大学院教育組織）を設置するという日本で最初の組織体系を構築し、新しい一步を踏み出した。

### 2 新薬学教育体制

1999（平成11）年当時、全国的に薬剤師教育の改善に関する議論が続いていたが、学部教育6年制に対する当面の解決策として、諸般の事情（膨大な関連予算、実務実習実施体制、高度薬剤師の医療現場における需要動向、創薬研究者養成機能との関連など）から、学部4年プラス大学院博士前期課程2年（4+2）の一貫した教育課程で医療薬学を教授するという案が文部省・厚生省の統一見解になっていた。本学では1998（平成10）年、大学院臨床薬学専攻が開設されたばかりであるため、4+2年の薬剤師養成体制を推進し、内容の充実を図ることが当面の責務であると考えられた。その後、我が国では、医療技術の高度化や医薬分業の進展等に伴う医薬品の安全使用や薬害の防止といった社会的要請に応えるため、医療の担い手として高度な薬剤師の養成教育が求められ、2004（平成16）年5月に学校教育法が、続いて同年6月に薬剤師法が改正され、2006（平成18）年4月1日より薬学教育に関する法改正が施行された。この法改正を受けて、薬学領域の新しい展開に対応できる人材の育成のため、全国の国公立大学薬学部では、6年制学科と4年制学科の2学科を設置した。

薬学教育制度の変更に伴い、本薬学部も2006（平成18）年度から薬剤師養成を目指す6年制の薬学科と創薬及び関連の生命科学の研究者養成を目指す4年制の創薬・生命薬科学科の2学科制に改組された。この改組において、総合大学という特色を活かして、4年制の創薬・生命薬科学科に12名の発生医学研究センター及び生命資源研究・支援センター教員を専任教員として迎え、先端の生命科学教育の充実を図った。更に、薬剤師養成教育の6年制化に伴う医療薬学教育を充実させるために、新たに、臨床薬理学分野及び医療薬剤学分野が設置され、4名の教員が大学当局から配置されたことにより、医療薬学教育が格段に充実することになった。これを活かして、薬学科では指導的立場で医療をリードする薬剤師の養成を目指している。一方、本薬学部が優れた創薬研究者を数多く輩出してきた歴史と伝統に鑑み、企業3社の協力による3つの寄附講座と専任教員による我が国初の薬学部附属創薬研究センターが設置され、創薬研究者の養成に力を注げる体制を構築してい

表12 2006年当時の学科と教育目的

学科名	教育目的
薬学科 (6年制)	豊かな人間性、柔軟な社会性、医療における倫理観を育みながら、医療系薬学及び衛生・社会系薬学を中心とした応用的学問を修得させ、高度化する医療において薬物治療の指導者となる資質の高い薬剤師、疾病の予防及び治療に貢献する臨床研究者として活躍する人材の育成
創薬・生命薬科学科 (4年制)	独創的な発想力、探求心、創薬マインドを育みながら、物理系薬学、化学系薬学、生物系薬学を中心とした基盤的学問を修得させ、創薬科学や生命薬科学分野の先端的研究者、医薬品等の開発・生産・管理の場で先導的役割を担う研究者、技術者及び医薬品情報担当者等として活躍する人材の育成

ることも大きな特徴である。

「薬学科」では、豊富な人材を擁する医療薬学系教員（実務実習担当教員を新たに4名採用）に加え、医学系教員の協力により、その入学定員は55名と国立大学の中では6年制薬学科の割合が最も高く、他大学では実現できそうにない高度な薬剤師養成教育を行うことを目指している。すなわち、大学院医学薬学研究部という独自の組織体系を活かして、基礎医学系と臨床系教員の協力により特長ある薬学教育及び実務実習カリキュラムを編成した。特色ある教育プログラムとして、臨床実務実習の中で病院実務実習の一環として、熊本大学医学部附属病院における「医学生の実習（ポリクリ）に連携した参加型実務実習」（6年制薬学科学生全員を対象）が行われている。本実習では、熊本大学医学部附属病院各診療科スタッフの全面的な協力を仰ぎ、将来、医療現場で協働作業を行う医学生と薬学生が学生のうちから、共に学ぶ体験、をする機会を提供している。なお、参加型実務実習の開始前に、必要な基本的な能力（知識・技能・態度）を適切に評価するための薬学共用試験（基礎知識を問うコンピュータ支援基礎学力試験「CBT」及び技能や態度を問う客観的臨床能力試験「OSCE」）が導入された。

「創薬・生命薬科学科」では、センター系教員も参画し、少数精鋭をモットーに、入学定員を35名とし、学生の自主性を尊重したカリキュラムを編成した。なお、本学科は研究者養成を主たる目的としていることより、学部卒業後、2年（修士）あるいは3年（博士）の大学院へ進学することが期待されている。この学科の卒業生には薬剤師国家試験の受験資格が認められていない。ただし、教育制度の移行処置として2017（平成29）年度入学者まで、大学院2年間を修了した後、更に必要な単位を取得し、かつ5ヵ月の実務実習を行い、一定の要件を満たすと、薬剤師国家試験の受験資格が厚生労働大臣から認定される場合がある。

### 3 薬学共用試験・実務実習開始

薬学共用試験のうち、OSCEは2009（平成21）年12月6日に実施され、4年生57名の全員が合格した。CBTは2010（平成22）年1月23日に実施され、1名が不合格となったが、その後、3月13日に実施された再試験により合格を果たし、全員が薬学共用試験をパスした。本学部学生の病院・薬局への配属に関しては、九州・山口地区病院・薬局実務実習調整機構、県薬剤師会・県病院薬剤師会（熊本県・鹿児島県・大分県）との連携体制のもとで行われた。九州・山口地区病院・薬局実務実習調整機構の取り決めに従い、大学所在地を

中心に九州・山口地区内で実習を完結するという基本方針のもとで実習施設のマッチングが行われた。学生の配属決定に際しては、通学経路や交通手段等を配慮して、薬学科学生57名の現住所及び帰省先住所をもとに、本学部としての実習実施施設（案）を九州・山口地区病院・薬局実務実習調整機構及び各県薬剤師会及び病院薬剤師会に提示し、各県薬剤師会実習委員会との協議により決定した。薬局実習の場合は、1薬局に学生2名を原則として配属を決定した。病院実習に関しては、施設の規模や薬剤師数に応じて、複数の学生を受け入れていただいた。

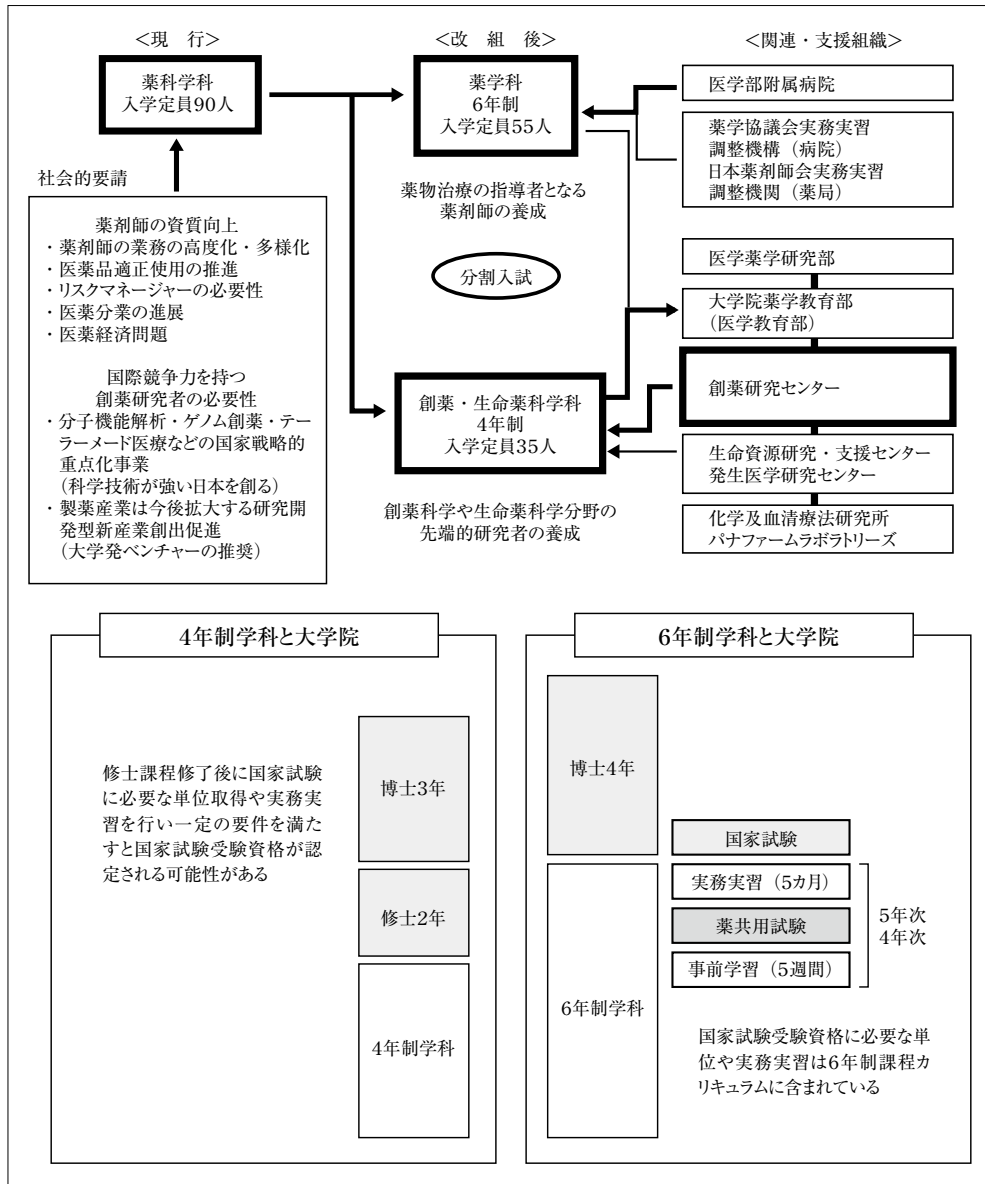


図1 2006年当時の薬学部組織と大学院との関係

表13 2006年当時の卒業要件

■薬学科			■創薬・生命薬科学科		
	区分	単位		区分	単位
教養教育	基礎セミナー	2	教養教育	基礎セミナー	2
	情報科目	2		情報科目	2
	外国語科目 必修外国語	10		外国語科目 必修外国語	10
	外国語科目 自由選択外国語	20以上		外国語科目 自由選択外国語	20以上
	主題科目Ⅰ			主題科目Ⅰ	
	主題科目Ⅱ			主題科目Ⅱ	
	学際科目			学際科目	
	開放科目			開放科目	
	小計	34以上		小計	34以上
専門教育	専門基礎科目 必修	14	専門教育	専門基礎科目 必修	14
	専門科目 必修	151		専門科目 必修	27
	小計	165		専門科目 選択	49以上
	合計	199以上		小計	90以上
					合計

表14 2006年当時の履修モデル

■薬学科					■創薬・生命薬科学科				
	学年	区分	授業科目(単位数)	合計単位数		学年	区分	授業科目(単位数)	合計単位数
履修計画	1年	生物系	生化学Ⅰ(2)、生化学Ⅱ(2)	20	履修計画	1年	生物系	生化学Ⅰ(2)、生化学Ⅱ(2)	20
		有機化学系	有機化学Ⅰ(2)、有機化学Ⅱ(2)				有機化学系	有機化学Ⅰ(2)、有機化学Ⅱ(2)	
		物理化学・分析化学系	物理化学Ⅰ(2)、物理化学Ⅱ(2)、分析化学Ⅰ(2)				物理化学・分析化学系	物理化学Ⅰ(2)、物理化学Ⅱ(2)、分析化学Ⅰ(2)	
		衛生薬学・一般薬学	薬学概論(1)、早期体験学習(1)				衛生薬学・一般薬学	薬学概論(1)、早期体験学習(1)	
		医療基礎薬学	医療倫理学Ⅰ(2)				医療基礎薬学	医療倫理学Ⅰ(2)	
		生命科学	病態生理解剖学(2)				生命科学	病態生理解剖学(2)	
	2年	生物系	生物学Ⅲ(2)、微生物化学Ⅰ	29		2年	生物系	生物学Ⅲ(2)、微生物化学Ⅰ(2)、創薬微生物学実習(1)、創薬名前化学実習(1)、ゲノム創薬科学実習(1)、遺伝子機能応用演習(2)	30
		有機化学系	有機化学Ⅲ(2)、有機化学Ⅳ(2)、生薬学Ⅰ(2)、化学系薬学実習(2)				有機化学系	有機化学Ⅲ(2)、有機化学Ⅳ(2)、生薬学Ⅰ(2)	
		物理化学・分析化学系	物理化学Ⅲ(2)、分析化学Ⅱ(2)、物理系薬学実習(2)				物理化学・分析化学系	物理化学Ⅲ(2)、分析化学Ⅱ(2)、創薬分析化学実習(1)、医薬品合成学実習(1)	
		衛生薬学・一般薬学	導入実習(1)				衛生薬学・一般薬学	導入実習(1)	
		医療基礎薬学	免疫学(2)、薬理学Ⅰ(2)、薬理学Ⅱ(2)				医療基礎薬学	薬理学Ⅰ(2)、薬理学Ⅱ(2)	
		生命科学	分子生物学(2)				生命科学	実験動物学・生殖工学実習(1)	
3年	生物系	生体機能化学(2)、微生物化学Ⅱ(2)、生物系薬学実習(2)	34	3年	生物系	生体機能化学(2)、微生物化学Ⅱ(2)			
	有機化学系	有機化学Ⅴ(2)、有機化学Ⅵ(2)、生薬学Ⅱ(2)							
	物理化学・分析化学系	放射化学(2)							

履修計画	3年	衛生薬学・一般薬学	衛生薬学Ⅰ(2)、衛生薬学Ⅱ(2)	26
		医療基礎薬学	薬理学Ⅲ(2)、薬剤学Ⅰ(2)、薬剤学Ⅱ(2)、製剤学Ⅰ(2)	
		臨床薬学	臨床心理学(2)、臨床検査学(2)、薬物治療学Ⅰ(2)、医薬品情報管理学(2)	
	4年	衛生薬学・一般薬学	毒性・環境薬学(2)、薬事関連法規(2)、医療経済学(2)	26
		医療基礎薬学	医療倫理学Ⅱ(1)、漢方概論(2)、製剤学Ⅱ(2)、製薬概論(1)	
	4年	臨床薬学	薬物治療学Ⅱ(2)、薬物治療学Ⅲ(2)、腫瘍治療学(1)、臨床薬物動態学(1)、医薬統計学(2)、地域薬局学(2)、実習前総括講義(1)、実務実習準備(4)	21
		臨床薬学	薬物処方学(1)、病院実務実習(10)、薬局実務実習(10)	
	6年	生物系	遺伝子機能応用学演習(2)	16
		有機化学系	創薬基礎分子設計学演習(2)	
		物理化学・分析化学系	生体機能分子合成学講習(2)	
衛生薬学・一般薬学		企業経営・特許管理学(2)		
医療基礎薬学		創薬学Ⅰ(2)、創薬学Ⅱ(2)		
生命科学	バイオ情報学(2)	12		
4～6年	特別実習		特別演習(12)	
合計				158
学 位		学士(薬学)		

履修計画	3年	有機化学系	有機化学Ⅴ(2)、有機化学Ⅵ(2)、生薬学Ⅱ(2)、創薬・天然物化学実習(1)	34
		物理化学・分析化学系	放射化学(2)、放射性医薬品実習(1)、生体機能分子合成学演習(2)	
	3年	衛生薬学・一般薬学	衛生薬学Ⅰ(2)、衛生薬学Ⅱ(2)、環境衛生薬学実習(1)	10
		医療基礎薬学	薬理学Ⅲ(2)、薬剤学Ⅰ(2)、薬剤学Ⅱ(2)、製剤学Ⅰ(2)、創薬学Ⅰ(2)、創薬製剤学実習(1)、実験動物解剖・薬理学実習(1)、創薬製剤学実習(1)	
	4年	物理化学・分析化学系	機能分子構造解析学演習(2)	12
衛生薬学・分析化学系		毒性・環境薬学(2)、企業経営・特許管理学(2)		
3～4年	特別実習	特別演習(創薬科学系)	106	
合計				106
学 位		学士(創薬科学)		

表15 病院・薬局実習施設の所在地及び施設数及び受入学生数(2010年)

所在地	病院実習		薬局実習	
	施設数	受入学生数	施設数	受入学生数
熊本県	13	49	27	49
鹿児島県	1	6	3	6
大分県	2	2	1	2

6年制教育に関して2009(平成21)年4月には「臨床教授」制度を新設し、学外の医療現場で活躍されている熊本県内の医師及び薬剤師を「臨床教授」に任命した。この制度は、現場と強いパイプを構築することによって、学内の医療薬学教育体制の充実を図るものである。



---

## 第5項 将来の構想

---

本学部では、学校教育法及び薬剤師法の改正(2004年)に伴い、2006(平成18)年4月に改組を行い、高度な専門性を有する指導的薬剤師の養成を目的とする6年制課程の薬学科及び国際競争力のある研究者養成に特化した4年制課程の創薬・生命薬科学科を併設した。現在進行中の本学「第二期中期計画・中期目標」(2010～2015年度)、「中長期的な大学教育の在り方に関する第一次報告—大学教育の構造転換に向けて—」(中央教育審議会大学分科会報告、2009年6月)、「日本の展望—学術からの提言2010 薬学分野の展望」(日本学術会議薬学委員会報告、2010年4月)等に示されている薬学に向けられた社会的要請を踏まえつつ、本学部が1885(明治18)年に私立熊本薬学校としての創立以来培ってきた伝統と実績を基盤として、両学科の教育・研究面での更なる充実を図るため、以下に示す環境・体制整備を計画している。

### (1) 次世代を担う優秀な人材の確保

本学部では、次世代を担う優秀な入学生をリクルートするために、九州・山口地区の高校生を対象に、オープンキャンパス、高校訪問、出前授業、学部説明会、薬学展、九州・山口薬学大会(薬剤師会の学術大会)での大学合同オープンキャンパスなどを積極的に行い、高大連携を推進している。特に、薬学科及び創薬・生命薬科学科のアドミッションポリシーや、両学科がどのような人材を社会に輩出するかなど新しい薬学教育について、高校生、保護者、進路指導教員等に、重点的に情報提供している。一方、在学生に対しては、奨学金制度の充実を図り、学生の学力向上と優秀な人材の育英を目的として、「薬学部125周年記念甲斐原奨学金」制度を設立した。将来的に、このような奨学制度を充実し、次世代を担う優秀な人材の育成に注力する。

### (2) 附属施設及び協力部局・施設の連携による教育体制の充実

本学部の教育・研究の充実を図るために、薬学科には臨床経験豊富な教員からなる2臨床薬学分野の設置(2006年度)、「臨床教授制度」の導入(2009年度)、薬剤師の生涯学習、職能支援及び地域医療への貢献と支援拠点を目的とした「附属育薬フロンティアセンター」(2008年度)及び「模擬薬局」(2009年度)を設置した。一方、創薬・生命薬科学科には“Made in Kumamoto”の創薬を目指した「附属創薬研究センター」を2006(平成18)年度に設置した。更に、両学科を横断する形で、薬剤師・一般への薬用植物、生薬、漢方薬の生涯教育・啓発、学生教育の充実、環境を考える薬剤師の教育・育成、薬用資源及び希少植物の保護・育種並びに薬用資源の研究拠点を目的として、2010(平成22)年4月に薬用植物園を改組し「薬用資源エコフロンティアセンター」を設置する予定である。本学部では、両学科の教育を担当する寄附講座や充実した附属施設及び協力部局・施設(医学部医学科・保健学科、医学部附属病院、発生医学研究所、生命資源研究・支援センター)の連携のもと、熊本県薬剤師会、熊本県病院薬剤師会をはじめ、地域医療・保健福祉を担う行政諸機関等の協力を仰ぎ、薬剤師及び薬学研究者の養成を行っており、本連携体制の更なる強化を図っている。

### (3) 新しい学習手法の導入及びカリキュラムの継続的な改善

本学部では、入学当初から、医薬品の創製、医療現場での医薬品の適正使用並びに環境衛生などの分野で薬学的専門性を活かし、医療人として国民の健康増進に寄与する職業観

を醸成するため、薬学概論、早期体験学習、医療倫理学などの授業の中で、本学部卒業生を中心に、これらの分野の第一線で活躍している薬学出身者の講演や職場の实地見学などを実施している。更に、低学年から課題設定・解決型学習を導入し、その授業形態にふさわしい総合的な成績評価の実施を推進している。特に、定期試験のみによる総括評価だけでなく、レポートや小テストの実施や出席状況の管理などの多様な方法の組み合わせによる形成的評価を取り入れ、学生に気づきの機会を与える教育方法を導入している。その一環として、eポートフォリオシステムを開発し試行的に授業に使用してきた。今後は、できるだけ多くの授業で活用し、学生が自分の学習履歴をネット環境下ならいつでもどこでも容易に確認できるユビキタスな環境を整え、学生が科目間の関連性を確認しながら学習を進める環境を整備する予定である。今後、学生からの授業改善アンケートや学生との意見交換会を通して、必要な見直しや改善を行い、カリキュラムの実効性を検証するシステムを構築する。

#### (4) エコファーマを担う薬学人養成の継続・推進

前述のごとく本学部は、2001(平成13)年9月、薬学部として全国で初めて「環境管理に関する国際規格ISO14001」の認証を取得した。学生、教職員が一丸となったその取り組みは高く評価され、文部科学省2008(平成20)年度「質の高い大学教育推進プログラム」に、本学部の「エコファーマを担う薬学人育成プログラム」が採択された。本プログラムは、リサイクルシステム、企業等の環境保全活動調査、中央官庁への研修、海外での实地調査、更には水俣病や薬害の被害者との交流等を大きな柱としている。本プログラムを通して、優れた環境マネジメント能力を持って、地域、国際社会に貢献できる行動派の薬剤師を養成することを目指している。今後はこれらのプログラムの定着化を図る必要がある。

#### (5) 地域社会との連携及び生涯学習の充実

本学部は、熊本県内外の薬局・病院の全面的な協力を得て、1997(平成9)年度から薬学部3年次の薬局実習及び病院実習を必修化した。特に、薬局実習の必修化は、全国に先駆けた取り組みであった。1998(平成10)年度には大学院に臨床薬学専攻を設置し、県薬剤師会や県病院薬剤師会の協力を得て、学部生の学内・学外実務実習、及び臨床薬学専攻や医療薬学講座博士前期課程の長期実務実習を充実させてきた。本学部では、地域の医療関係者の全面的な協力のもと、医療人としての社会的責任を果たす上での生涯学習の重要性を認識させる教育が行われているが、今後は、人的交流も含めた更なる連携体制の強化が望まれる。このように、学習の場を広く社会に求める「拡大キャンパス構想」を推進する。

以上、本学部は、大学院薬学教育部とのシームレスな連携を図り、教育・研究環境の整備充実に力点を置く。更に、本学部は、我が国最南端に位置する国立大学法人の薬学部として、その立地条件を考慮しつつ、local、national、globalと段階的で柔軟な視点で物事を捉え、社会に貢献する薬剤師及び薬学研究者を輩出することに全力を傾注する。

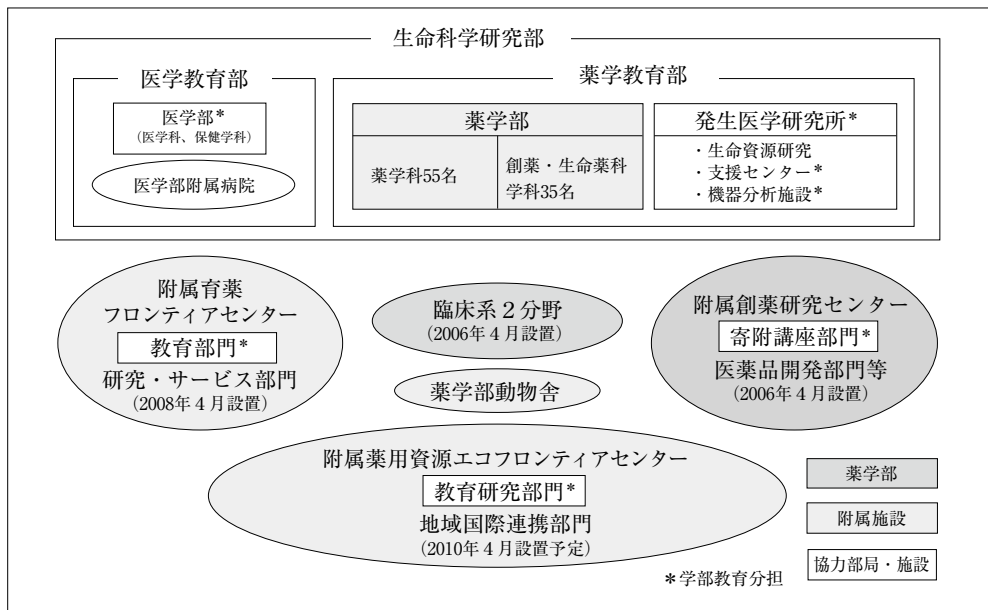


図2 薬学部、附属施設及び協力部局・施設の連携による教育体制

## 第3節 施設の変遷

### 第1項 薬学部建物の新築と大改修

年号が平成に変わってから、大学改革とあいまって、大学改造にも国はようやくその重い腰を上げ始めた。この当時、「国立大学のスラム化」とさえ極言された教育研究施設の著しい狭隘化と老朽化が、緊急な社会問題として世間の注目を集め始めた。本学薬学部も施設の多くが戦前から戦後の物資窮乏期、更に高度成長期に建てられたもので、経年による老朽化が問題となっており、全面的な大改修の必要に迫られていた。給排水系・ドラフト等の劣化により、漏水は日常茶飯事のことで、憂慮されたガス漏れさえも現実味を帯びてきた。このほかにも、電気使用量の急増に伴う電気容量の不足は教育・研究に多大の支障をきたす状態に至ったため、毎年のように大改修に要する予算が概算要求の最重点事項に取り上げられてきた。福利厚生施設の新設も必要に迫られていたが、これらの改修・新設は先送りの繰り返しであった。

しかもこの当時の文部省の財政は極度に窮乏し、一大学に膨大な改修費用を調達できる状況には到底ないという一般的認識があった。暗雲が漂っていた矢先の1993(平成5)年3月、思いもかけず突然、補正予算で措置される可能性が高いので学部の意思を早急に決定しておくようにという通達が入った。

当初、研究棟の建て替えを勧められたが、検査の結果、まだ十分な耐久性を保有していることが判明したため、建て替えという儂い夢は潰えた。研究棟大改修は1993(平成5)

年10月半ばに着工した。まずA、B棟の各研究室が必要最小限の荷物を抱えてC、D棟に仮移転することから始まった。設備・備品の大部分は体育館に、書籍は図書館書庫に保管した。改修は耐震壁を残してあらゆる壁を取り払い、窓枠も取り除く本格的工事で、新築同様に变身するものであった。5月に完成すると同時に逆移転、そしてC、D棟研究室内の仮移転が同時進行し、C、D棟の改修が終了したのは1994(平成6)年11月末であった。当初は予定されていなかった講義棟の改修も10月末で終わり、6月に竣工した分析センター4階の学生実習室を仮利用していた講義も11月初めから講義棟で平常再開された。補正予算での措置は予想をはるかに凌駕し、実験台・ドラフト・薬品棚等の内部設備すべてを新調できただけでなく、計画になかった動物舎拡張工事や構内道路整備に至るまで拡大された。特に、動物舎の拡張はそれまで不可能とされ、国公立薬学部長会議でも十数年来要望し続けていたにもかかわらず、どこの大学も実現していなかったのが、望外の喜びであった。特筆すべきは、1994(平成6)年度の1年間に多数の大型研究機器の導入を果たした点である。分析センターに新たに搬入された機器はX線結晶解析・粉末X線解析・500MHz NMR・MS・熱分析・蛍光寿命測定・円二色性分散等の多くを数えた。

しかし大改修は教育・研究に直接的な犠牲を強いるものであった。実習期間の短縮のみならず、講義だけの期間、実習だけの期間を余儀なくする変則カリキュラムを組まなくてはならず、学生への影響は計り知れないものがあった。研究面でも通常の3分の1しか割り当てられない実験室では修論院生にさえ、独自の実験台を与えることができず、昼夜交代性を採用して研究への影響を最小にとどめる苦心さえ見られた。苦衷を内に秘めた教員の研究への飽くなき執念と挑戦は、学生にも貴重な教訓を与えたに違いない。そしてまた、おびただしい設備・備品を抱える研究室の仮移転は、4年次学生及び大学院生の奉仕なしには行いうるものではなく、苦情ひとつ言わない学生たちの精勤には頭が下がる思いであった。

1995(平成7)年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の教訓を基に、同年12月25日に「建築物の耐震改修の促進に関する法律」(耐震改修促進法)が施行され、新耐震基準(1981年以前に建築された建物)を満たさない建築物(1,000㎡を超えるもの)について積極的に耐震診断や改修を進めることとなった。更に、整備を早急に進めるため、2006(平成18)年1



写真8 大改修後の薬学部

月に改正耐震改修促進法が施行されたのを機に、地震による建築物の倒壊等の被害から、学生、教職員等の生命・身体及び財産を保護するため、同法に基づき、建築物の地震に対する安全性の向上を図ることを目的に、薬学部本館(A・B・C棟)の耐震工事が、2007(平成19)年8月23日～2008(平成20)年2月8日まで実施された。

---

## 第2項 生命資源研究・支援センター（RI実験施設、機器分析センター）

---

### 1 沿革

生命資源研究・支援センターは、薬学部附属ではないが、大江地区RI施設（旧薬学部放射性同位元素総合研究室）及び機器分析センターが長く薬学部附属であったため、ここに記載する。生命資源研究・支援センターは、熊本大学における研究資源及び研究資源情報の利用等を通じて、諸科学分野の教育研究の総合的推進に資することを目的として、既存の動物資源開発研究センター、遺伝子実験施設、アイソトープ総合センター、3つのRI事業所及び機器分析センターを統合し機能的に再編して、2003（平成15）年度に発足した。地域、国内、そして海外に対して生命科学研究の支援と研究資源の供給を行うために、有機的に連携しながら研究及び業務を遂行している。組織としては、教育及び研究活動を行う2つの部門と、研究支援及び地域貢献活動を行う4つの共同利用施設で構成される。主な業務として、①遺伝子改変動物をはじめとする実験動物の作製、開発、保存、供給、データベースの構築、表現型解析及びバイオインフォマティクスに関わること、②動物実験、遺伝子実験、アイソトープ実験及び機器分析実験に係る研究、教育、啓発、情報提供並びに技術指導などを実施している。

#### （1）部門・分野の研究活動

##### ①動物資源開発研究部門

- 1) 病態遺伝分野 ヒトT細胞白血病ウイルスの動物モデルの作製、実験動物の感染症、細菌叢及び動物実験関連の規制の研究
- 2) 技術開発分野 遺伝子改変動物の作製及び遺伝子改変技術の開発
- 3) 資源開発分野 生殖工学技術の開発及び遺伝子改変動物等の保存、供給
- 4) バイオ情報分野 可変型遺伝子トラップ法を用いた疾患モデルマウスの作製及び解析
- 5) 表現型クリニック分野 MSM/Ms等を用いた疾患発症及び発生の分子機構に関する研究、ES細胞におけるゲノム操作法の開発

##### ②資源解析部門

- 1) 機器分析分野 医薬品の血中濃度の定量、環境ホルモン様物質の光及び微生物分解の研究
- 2) RI実験分野 生命科学分野等におけるRIや放射線に関する研究や教育教材開発

#### （2）共同利用施設

- 1) 動物資源開発研究施設（本荘団地中地区）
- 2) 遺伝子実験施設（本荘団地中地区）

### 2 大江地区RI施設

1958（昭和33）年4月1日から施行された「放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律」（放射線障害防止法）に基づき本学部にRIの使用が承認された。1963（昭和38）年3月に独立の放射性同位元素総合研究施設として、化学実験室及び測定室（64.8㎡）が、続いて1965（昭和40）年3月に第2期工事として学生実習を対象とした測定室及び動物飼

育室等が竣工し、総面積274㎡（うちRI占有面積200㎡）の施設が完成した。1969（昭和44）年4月に薬学部における第11番目の講座として放射薬品学講座が誕生し、当施設の管理運営に協力することになった。RI利用の黎明期の目標が主に物理化学ないしは合成化学的利用にあったために生物化学系の実験に対する配慮が少なかったといえる。更に、当時の法律に対して本施設は十分に適合するものであったが、その後の法規制の強化並びに研究の進展に伴う核種及び使用量の増加等に対応できなくなってきた。そのため、1979（昭和54）年頃より、施設の改築ないしは新築の要求が利用者の間より高まり出し、1983（昭和58）年には、全面改築案で予算が示達された。しかし、この時の改修費（約1億円）で新築が可能であると判断され、同年8月になって急遽新築に計画が変更された。このような経緯で、旧施設の隣接地に現在のRI施設が完成したのは1984（昭和59）年3月26日であった。2階建273㎡の瀟洒な外観は薬学部の中では体育館とともにひときわ目立つ存在である。



写真9 大江地区RI施設

外観のみでなく、放射線防護関係の設備も一新され、極めて安全性の高い施設となった。排水系には熊本大学では最初の二重壁構造が採用され、排気系（3系統）ともに放射能レベルはモニターによって管理室で連続記録されている。旧施設は、専門業者によって排水系及び排気系の撤去並びに除染作業が行われた後、科学技術庁に正式に廃止届を提出し、現在、通常研究施設として利用されている。

### 3 機器分析センター

1991（平成3）年度の予算案で機器分析センターの設置が認められ、それまで薬学部が独自に運営を続けてきた分析センターは同年4月より文部省令による全学共同研究施設として認可されることになった。当分の間、薬学部の現有施設・設備を使って運営されることになり、センター長には薬学部の合屋周次郎教授が就任し、専任教員として城戸裕助教授（現機器分析分野長）が任命された。1993（平成5）年3月になり突如、研究棟の大改修と同時に分析センターの新築も決定した。これには薬草園の一角を切り崩す必要があったが、体育館裏手の隣接地に代替地としてより広



写真10 機器分析センター、大江総合研究棟、図書館・創薬研究センター  
中央にあるのが大江総合研究棟、左側が機器分析センター、右側が図書館・創薬研究センターである

く新しい薬草園を構築することで対応した。新築とともに、多くの高価な分析機器が導入された。2003(平成15)年度より、前述のように生命資源研究・支援センターの1部門になったが、2011(平成23)年度から生命資源研究・支援センターから創薬研究センター(後述)に統合された。

---

## 第3項 実験動物施設

---

### 1 沿革

今では薬学の教育・研究には動物を用いることが不可避となっている。本薬学部では、長らく実験動物は薬物学教室の一角で飼育されていたが、1965(昭和40)年に放射性同位元素総合研究室の一部を借用し、熊本大学薬学部実験動物舎の名称を附して仮設の施設がスタートした。その後、1977(昭和52)年の新設講座研究棟の新築に伴い鉄筋コンクリート一部2階建の施設が新築された。更に、1995(平成7)年の大規模改修に伴い、実験動物舎も増改築され、熊本大学薬学部動物実験研究施設として運用を開始、現在に至っている。

### 2 施設・設備

1965(昭和40)年3月に完成した仮設モルタル式実験動物舎の総面積は74㎡、飼育室3室、飼料調製室、機械室及び金網囲いの運動場より構成されていた。空気調節設備は、中央ダクト方式により、換気回数は1日当たり4回、温度条件は夏季 $25 \pm 3^{\circ}\text{C}$ 、冬季 $20 \pm 3^{\circ}\text{C}$ であった。1977(昭和52)年度に完成した新築実験動物舎の総面積は207㎡(1階139㎡・2階68㎡)であり、飼育室5室、調理及び飼料室、手術室及び準備室、消毒洗浄室、管理人室、空調機械室及び犬猫用運動場(1983年に増設)より構成されていた。空調設備は、2系統であった。

1995(平成7)年7月に大幅に増改築された動物実験施設は鉄筋2階建で、総面積は501㎡(1階272㎡・2階229㎡)となった。飼育室10室(うち1室はクリーン動物飼育室)に加え、手術室、実験室3室(有害物質実験室・特殊動物実験室・クリーン動物実験室)、検疫室、空調機械室、洗浄・消毒室及び飼料倉庫よりなり、施設北側には動物及び重量物品の搬入出用にリフトが新設された。空調施設は、1階と2階の飼育室のための2系統と、そのほかに、各特殊飼育室及び実験室のための4系統の計6系統を設け、排気口には、臭気除去のための活性炭フィルターを備えている。各飼育室には自動明暗サイクル式照明、自動給水洗浄式の飼育架台(イヌ、ウサギ、モルモット用)及びアイソレーションチャンバー(クリーン動物飼育室)なども設けている。また、クリーン実験室には安全キャビネットをはじめ、炭酸ガス培養器、オートクレーブ等を備えている。2005(平成17)年10月と2006(平成18)年10月に、空調・脱臭設備の大幅な更新工事が行われ、臭気等の除去のため光触媒フィルター・LED脱臭方式がとられている。

### 3 管理運営

1965(昭和40)年3月より使用を開始した仮設の実験動物舎は、当初自主的な管理運営が行われていたが、より円滑な運営のために、1971(昭和46)年に薬学部内常置委員会の

中に実験動物舎運営委員会が設置された。当初の委員会は、委員長を含む3名の委員により構成されていたが、現在では、委員長以下7名の委員(教員)が、常駐する管理人とともに、主にその管理にあたり、必要に応じて当施設の利用研究室(11研究室)の代表者を交えた協議がなされている。

#### 4 実験状況

現在の実験動物施設で飼育している動物種は、イヌ、ウサギ、モルモット、ラット、マウス及びアフリカツメガエルなどであり、薬効薬理学的、薬物動態学的及び病態生理学的研究等に利用されている。特に近年では、遺伝子改変マウスの飼育が急増している。

#### 5 実験動物の慰霊

実験に用いた動物の慰霊のため、1973(昭和48)年以来、各関係研究室の職員・学生と3年次学生の出席のもとに毎年度末に委員会主催の動物慰霊祭が催されている。2003(平成15)年3月に実験動物慰霊之碑が建立されて以降は、薬学部主催によりこの慰霊碑の前で慰霊祭が行われている。

---

### 第4項 体育館の新設

---



写真11 大江地区体育館

従前からの懸案であった体育館が、加瀬佳年前学部長の尽力により、1983(昭和58)年3月に新設された。第一、第二体育室等を合わせて1,056㎡で、第二体育室は式典や講演会等多目的に使用できるよう配慮された。単独学部に体育館が設置されるのは、それまでほとんど例を見ず、画期的なことであった。

---

### 第5項 蕃滋館の新設

---

熊薬50周年とほぼ同時期に新築された製薬工場は、50年以上経過した後も老朽化しつつも福利厚生施設として利用されてきたが、1993(平成5)年度になり、永年にわたって切望していた福利厚生施設の新設が認められその役を終えた。旧福利厚生



写真12 蕃滋館



施設は取り壊され、新たに食堂のスペースを十分に取り、売店、研修室及び談話室を有する680㎡の施設が1993(平成5)年4月に開館した。新施設の名称は学生、教職員からの多数の応募の中から「蕃滋館」に決定した。外壁に曲線を取り入れた柔らかな外観に、芝生の前庭を配した全景はこれまでの国立大学では考えられない豪華さを誇る存在となった。

## 第6項 大江総合研究棟

大江総合研究棟は2004(平成16)年3月15日、崎元達郎熊本大学学長から小田切優樹薬学教育部長へ鍵引き渡し式が行われた。2003(平成15)年5月14日に着工して以来、約11ヵ月という短期間で事故もなく予定通り、鉄筋コンクリート造5階建の総合研究棟が完成した。

大江地区では1998(平成10)年に大学院臨床薬学独立専攻、2001(平成13)年に大学院分子機能薬学独立専攻が設置されたが、新設された4研究室(遺伝子機能応用学・機能分子構造解析学・薬物治療学・薬剤情報分析学)は、薬学部内の飛び地(会議室やセミナー室)を借りて、極めて狭隘な環境での教育・研究が余儀なくされてきた。念願叶って、大江総合研究棟は薬草園の一角(体育館の北側と機器分析センター棟の間)に整備された。総合研究棟(建物面積630㎡、延べ床面積2,820㎡)の外装、色彩や材料は、近接する機器分析センター棟を考慮し、キャンパス全体と調和のとれた外観とされた。1階には、医学・薬学系の研究組織の枠を越えた機動的プロジェクト型研究スペースとして共同研究室3室、2階には研究発表や講演会に使用できる240人収容可能な多目的ホールを設け、全学的な共同利用を図った。3～5階は、前述の独立専攻大学院基幹4講座が配置された。具体的には、3階に分子機能薬学講座の2研究室(遺伝子機能応用学・機能分子構造解析学)の実験室、5階は医療薬学講座の2研究室(薬物治療学・薬剤情報分析学)の実験室が配置され、4階フロアの廊下を挟んで、4研究室の教員と学生の居室が配置された。分野の異なる教員や学生が同じフロアでもとに学ぶ環境は、良い刺激となっている。更に、各階には給湯設備のあるリフレッシュスペースを設け、学生や教員などの談話・休憩の場として交流が深まるように設計された。

大江キャンパスは環境管理に関する国際規格ISO14001を認証取得していることから、「環境に優しい施設」をキーワードに、温暖化対策として屋上の空きスペースを緑化し、省エネルギー対策として複層ガラスや地熱を利用したアースチューブなどを使用した。1階のアプローチは緩やかなスロープで段差をなくし、ユニバーサルデザインにも配慮した。また、トイレ・廊下・階段・ホール等の照明は、人感センサーによる自動点滅とした。大江総合研究棟の設計にあたっては、ソフト・ハード両面で旧型の学部のバリアを取り除



写真13 大江総合研究棟

き、知の連携や物質的基盤を共有できるよう、可能な限り共同利用スペースを創出した。

---

## 第7項 熊薬同窓会館（宮本記念館及び百周年記念ホール）

---

2003（平成15）年1月23日に亡くなった故宮本佳博氏（1933年薬専卒）のご遺族から、故人の遺志により、遺産を熊本大学薬学部の発展のために使ってほしいとの申し出をいただいた。同年11月19日、崎元達郎学長と遺族の宮本博氏出席のもと、薬学会会議室にて故宮本佳博氏からの寄附金の贈呈式が執り行われた。その模様は、11月20日付の熊本日日新聞社会面に掲載された。故人の遺志ができるだけ尊重されるように、弟の宮本直喜氏と小田切優樹薬学部長との間で数度の打ち合わせを行い、その結果、寄附金を熊薬50周年記念館の改築に利用することに決定した。

熊薬50周年記念館は、1935（昭和10）年、本学の設立50周年を記念して、当時の熊本薬学専門学校卒業生の寄附金により建設され、以後、本学のさまざまな記念式典の会場として、また、学生・職員の憩いの場として長らく有効に利用されてきた。しかし、築60年を超えた近年では老朽化により、雨漏りやこれに伴う天井や床の腐食が進み、大規模な改修工事が必要であった。宮本記念館は、2004（平成16）年2月下旬に請負業者の入札があり、



写真14 宮本記念館

3月に着工され、6月には新記念館の地鎮祭が執り行われた。こうして、新記念館は11月に竣工した。建物としての50周年記念館は解体されたが、立派な材木により建設されていたため、使用できるものは再利用し、歴代校長の写真や120余年にわたる熊薬の歴史を回顧できる品々の展示スペースを設けるとい形で50周年記念事業にご寄附いただいた先輩方のご遺志を受け継げるように配慮した。

---

## 第8項 創薬研究センター

---

大学院実験研究棟（E棟）が1988（昭和63）年3月竣工、9月に図書分館E棟へ移転、情報処理室及び細胞培養DNA実験室が新設された。旧図書館跡は分析センターとして1989（平成元）年3月に竣工した。熊本大学薬学部附属創薬研究センターは、即戦力となる創薬研究者養成と大学発画期的新薬を目指して2006（平成18）年4月にE棟3階に新設された。初代創薬研究センター長は水島徹教授であった。このような研究センターが国立大学の薬学部に設立されるのは我が国初である。我々は創薬研究センターを通して、創薬研究者養

成と創薬研究の拠点としての、薬学部の更なる発展を目指している。

創薬研究センターは、プロジェクト研究部門・寄附講座連携研究部門・地域連携部門・医薬品開発支援部門の4部門からなる。その中心は医薬品開発支援部門であり、この部門が他の部門と協力して、実践的な創薬研究を行う。医薬品開発支援部門には、創薬研究に必要なすべての専門家が在籍する。この中には、有機合成や薬理学など薬学部に従来在籍している専門家だけではなく、特許、臨床開発、市場調査、関連法律、経営学などの専門家も含まれる。

創薬研究者に必要な学問分野は多岐にわたっている。生化学・有機化学・物理化学などの基礎学問、薬理学・製剤学・医療薬学などの薬学専門学問はもちろんのこと、臨床開発・特許・市場調査・関連法律などに関する知識と理解が必要である。これまで、これらすべての分野を網羅した教育(創薬研究者養成教育)は、他の理系学部・大学院ではもちろん、薬学部・大学院でも行われていない。創薬研究センターの医薬品開発支援部門はこれらすべての分野の専門家が在籍するので、薬学部・大学院の教育も担当することにより、即戦力となる創薬研究者を養成できる。

近年薬剤師教育の6年制がスタートし、同時に国公立大学と一部の私立大学には創薬研究者の養成を目指す4年制薬学部が誕生した。この新しいシステムを成功させるためには、薬剤師教育及び創薬研究者教育の両者をより一層充実したものにすることが必要であり、それができれば薬学教育全体が活性化されることになる。このうち、創薬研究者教育を充実させるために我々が新設したのが創薬研究センターである。我々は創薬研究センターを成功させることにより、創薬研究者教育、そして薬学教育の発展に貢献することを目標に努力している。

---

## 第9項 育薬フロンティアセンター

---

熊本大学薬学部附属育薬フロンティアセンターは2008(平成20)年4月に設立され、2009(平成21)年には大江総合研究棟1階に研究室が設置された。2010(平成22)年4月には、薬学部附属育薬フロンティアセンターの模擬薬局がA棟とC棟との間に完成予定である。薬学部附属育薬フロンティアセンターは、育薬に関する教育と研究の実践を通して、学部教育の質の保証及び大学院教育の実質化を図り、薬剤師の生涯学習と職能支援、更には基盤研究が生み出す知的財産を利活用した地域医療への貢献を標榜する中核的な支援拠点として設置された。本センターには、教育部門及び研究・サービス部門の2つが置かれた。教育部門では、6年制薬学科の4年次後期の「実務実習事前学習」及び薬学共用試験OSCEの事前学習を模擬薬局において実施し、薬学教育(6年制)第三者評価に耐えうる学部教育の質を保証するものである。更に、「出口から考えた教育」、「社会のニーズを反映させた問題解決型教育」を取り入れた統合型カリキュラムの実施により、大学院教育の実質化も図っている。一方、研究・サービス部門では、医薬品の適正使用、薬物治療の質の向上につながる育薬に関する基盤研究の実施、地域医療に貢献する「薬剤師の母港」としての実践的役割、タイムリーな情報発信を通して、医療現場と大学の間のネットワーク構築を目指している。

## 第4節 教育・研究基盤の拡充

### 第1項 薬学部所属分野

#### 1 医療薬学分野

医療薬学分野は、2006（平成18）年4月に新設され、初代教授として丸山徹が就任し、同時に渡邊博志講師が着任した。研究室開講以来、小田切優樹教授（崇城大学薬学部教授；熊本大学名誉教授・客員教授）と密に連携しながら、薬剤学の命題である“薬物投与の最適化”を肝に銘じ、「薬物の生体内動態制御の機序解明とナノ医薬のドラッグデリバリーシステムの開発」に関する研究に鋭意努力している。

すなわち、薬剤学・薬物動態学を中心とした基礎薬科学研究に加え、臨床医とタイアップした臨床育薬研究にも取り組み、既存薬物を活用した新たな治療方法の開発を試みているところである。このように我々の分野では、目下、Bench to Bedside あるいは Bedside to Benchの両面より幅広い研究活動を実施している。研究体制も何とか整備されたところで、いささかでも熊薬の発展に寄与できればとの思いで、研究室メンバー一同、日夜研鑽を積んでいる。

#### 2 臨床薬理学分野

臨床薬理学分野は、2006（平成18）年4月に新設され、初代教授として平田純生が就任し、同時に門脇大介助教が着任した。熊本大学薬学部附属育薬フロンティアセンターは2008（平成20）年4月に設立され、2009（平成21）年には大江総合研究棟1階に研究室が、薬学部中央に模擬薬局が完成し、目に見える存在になった。

研究課題は主に慢性腎臓病（CKD）患者への薬物適正使用である。特に熊本市は透析導入率が日本で最も高いといわれており、CKDの進行を防ぎ、薬物起因性腎障害を防止する適切な薬物療法を提供できる研究に力を注いでいる。

具体的にはCKD患者を透析患者に至らせないような薬物療法、あるいは心血管病変を防止する薬物療法に関する研究、あるいは透析患者の予後を改善しQuality of Life（QOL）を向上させるような薬物療法に関する研究などである。更に超小型透析器を用いた薬物の *in vitro*における薬物の除去性の検討及び透析モデルラットを用いた薬物の透析による除去特性について検討することによって、頻回の採血、多大な費用を伴う臨床研究を実施することなく、透析による薬物除去率を予測可能な数式の開発を目指している。

目標は研究だけにとどまらず、育薬フロンティアセンターを通じて地域薬剤師との連携を図り、学生だけでなく地域の薬剤師も含めて、「科学する薬剤師」を育て、薬物適正使用の普及を図り、CKDの薬物療法のエキスパートを育成することである。

薬学部には現在、次の3つの寄附講座が設置されている。

### 3 薬学部病態薬効解析学分野（寄附講座）

病態薬効解析学講座は阿蘇製薬株式会社の寄附講座として、1991（平成3）年10月に由井菌倫一教授を迎えて開設された。由井菌教授在職中は、森内宏志助手（現崇城大学薬学部准教授）とともに薬理学の観点から安全性・有効性の高い治療薬の開発を目指した研究が展開された。1999（平成11）年3月の由井菌教授の定年退職を受け、同年4月に今井輝子教授が昇任し、現在に至る。1999（平成11）年10月から2002（平成14）年3月まで武谷恵助手が、同年5月から2006（平成18）年3月まで橋本満助手（現松山大学薬学部准教授）が今井教授のもと、研究に従事した。2007（平成19）年1月から大浦華代子助教が務めている。現在、本講座では今井教授を中心に、生体内で解毒を担う代謝酵素としてカルボキシルエステラーゼに着目し、その構造・機能解析とそれに基づくドラッグデザイン法の確立を目的とした研究を指向している。

### 4 先端DDS学分野（寄附講座）

先端DDS学講座は、薬学部内において高度でかつ最先端のDDS（ドラッグデリバリーシステム）研究が行えるよう、LTTバイオフーマ株式会社の寄附講座として、2006（平成18）年4月に薬学部（創薬研究センター）に開設された。研究・教育・研究室の運営は、薬学微生物学分野の水島徹教授により行われている。水島教授は日本DDS学会の評議員でもあり、講座開設以来、DDSを用いた新しい医薬品の開発及び新しいDDS技術を確立する研究をテーマとし、臨床応用につながる独創的なDDS研究を展開している。特に最近では、レシチン化SOD（活性酸素除去タンパク質であるSODをレシチン化することにより、組織移行性を高めたDDS医薬品）の間質性肺炎に対する有効な投与経路を発見し、現在、連携企業であるLTTバイオフーマ株式会社により臨床試験が行われている。

### 5 医薬高分子学分野（寄附講座）

医薬高分子学分野は、ニプロ株式会社の寄附講座として、2006（平成18）年4月に新設され、初代教授に甲斐俊哉客員教授（現東北ニプロ製薬株式会社代表取締役社長）が就任した。医薬高分子学分野は、バイオ医薬や医療用ガス分子の画期的送達を可能とする医薬高分子の開発を目的として、甲斐客員教授をリーダーに、丸山徹教授（医療薬理学）、小田切優樹名誉教授（崇城大学薬学部教授・熊本大学客員教授）の3分野による協力体制で、日々研究と教育に取り組んでいる。

---

## 第2項 ISO14001取得

---

21世紀は環境の時代といわれ、世界中のあらゆる活動は地球環境との調和やその保全に配慮する必要がある。本学薬学部では、他学部在先駆けて、2000（平成12）年3月の教授会において環境管理の国際規格ISO14001の導入を決定し、矢原正治助教授を中心とする環境安全委員会委員の尽力により、2001（平成13）年9月に認証を取得した。具体的には、環境マネジメントシステムISO14001に関する組織の構築、関係委員会の設立、講習会の実施、環境方針などの企画立案、認証の受審・取得と一連の作業が行われた。2000（平成

12) 年9月から開始した講習会では、ISOコンサルタントの松元和一氏(チッソ水保・肥後化成工業)に講師を依頼し、教職員と学生が一体となって認証取得に向けた準備がなされた。熊薬独自の環境理念に基づいて具体的な環境マニュアルが策定され、緑豊かなキャンパスの持続的な環境保全に努めることにより、教育、研究、大学運営などあらゆる面でさまざまなメリットが生まれることとなった。

---

### 第3項 教育GP

---

本学部は、2001(平成13)年9月、薬学部として全国で初めての「環境管理に関する国際規格ISO14001」の認証を取得した。循環型社会の構築、自然環境保全、公害防止、医薬品・毒劇物の安全管理等、環境衛生に配慮した教育研究活動の取り組みは高く評価され、文部科学省の2008(平成20)年度「質の高い大学教育推進プログラム」(教育GP)に、本学部の「エコファーマを担う薬学人育成プログラム」が採択された。本プログラムは、リサイクルシステム、企業等の環境保全活動調査、中央官庁への研修、海外での実地調査、更には水保病や薬害の被害者との交流等を大きな柱としている。本プログラムを通して、優れた環境マネジメント能力を持ち、地域や国際社会に貢献できる行動派の薬剤師・薬学研究者を養成することを目標としている。

---

### 第4項 その他

---

#### 1 歴代校長・薬学部長

表16 前身校歴代校長及び薬学部長一覧

■私立熊本薬学校校長

代	氏名	在任期間
初代	平山増之助	1888年1月～1889年7月
2代	中西 司馬	1889年7月～1895年4月
3代	森本栄太郎	1895年4月～1903年5月
4代	安香 堯行	1903年5月～1908年3月

■私立九州薬学校校長

代	氏名	在任期間
初代	安香 堯行	1908年4月～1910年1月

■九州薬学専門学校校長

代	氏名	在任期間
初代	安香 堯行	1910年1月～1925年3月

## ■官立熊本薬学専門学校校長

代	氏名	在任期間
初代	安香 堯行	1925年2月～1928年1月
事務取扱	森本栄太郎	1928年1月～1928年2月
2代	村山 義温	1928年2月～1942年3月
3代	藤田 穆	1942年3月～1951年3月

## ■熊本大学薬学部学部長

代	氏名	在任期間
初代	藤田 穆	1949年5月～1960年3月
2代	加来 天民	1960年4月～1960年12月
3代	野々村 進	1960年12月～1964年12月
4代	林 清五郎	1964年12月～1966年12月
5代	一番ヶ瀬尚	1966年12月～1969年6月
6代	小山 鷹二	1969年6月～1970年5月
7代	一番ヶ瀬尚	1970年6月～1976年5月
8代	加瀬 佳年	1976年6月～1982年3月
9代	久保田幸穂	1982年4月～1983年7月
10代	久野 拓造	1983年8月～1987年7月
11代	柴田 元雄	1987年8月～1989年7月
12代	杉井 篤	1989年8月～1993年3月
13代	古川 潮	1993年4月～1995年3月
14代	國枝 武久	1995年4月～1999年3月
15代	上釜 兼人	1999年4月～2003年3月
16代	小田切優樹	2003年4月～2009年3月
17代	高濱 和夫	2009年4月1日～現在

## 2 附属図書館薬学部分館長一覧

表17 附属図書館薬学部分館長一覧

代	氏名	在任期間
初代	野々村 進	1950年6月～1951年7月
2代	岡野 定輔	1951年8月～1953年6月
3代	小山 鷹二	1953年7月～1959年6月
4代	占部 則明	1959年7月～1963年3月
5代	村田 敏郎	1963年4月～1966年3月
6代	加瀬 佳年	1966年4月～1971年5月
7代	柴田 元雄	1971年5月～1975年5月
8代	米田 文郎	1975年5月～1979年5月
9代	兎島 昭次	1979年5月～1982年3月
10代	合屋周次郎	1982年4月～1987年3月
11代	古川 潮	1987年4月～1991年3月

代	氏名	在任期間
12代	國枝 武久	1991年4月～1993年3月
13代	宮田 健	1993年4月～1997年3月
14代	原野 一誠	1997年4月～2003年3月
15代	後藤 正文	2003年4月～2004年3月
16代	中山 仁	2004年4月～2005年3月
17代	大塚 雅巳	2005年4月～2008年3月
18代	中島 誠	2008年4月～2010年3月

### 3 薬学部事務歴代役職員一覧(1985年以降の異動分)

表18 歴代薬学部事務職員役職員一覧

事務長	淵上忠明(1986年4月)―西村 潔(1988年4月)―本田 茂(1990年4月)―西村凱三(1991年9月)―高宗武司(1993年4月)―安藤孝太郎(1997年4月)―松野繁喜(1999年4月)―前田良夫(2001年4月～2003年3月)
事務長補佐	森田和彦(1986年3月)―南 敬二郎(1991年4月)―吉田隆昭(1994年4月)―松村 均(1998年4月～2000年3月)
専門員	赤木 寛(2000年4月～2001年3月)
学務課課長補佐	石坂恒雄(2003年4月～2004年3月)
学務課副課長	石坂恒雄(2004年4月～2006年6月)
副事務長	石坂恒雄(2006年7月～2007年4月)―中富 宏(2007年4月―現在に至る)
庶務係長	矢富 雙(1987年4月)―片山進一(1990年4月)―前田照治(1992年4月)―坂本和子(1996年4月～1999年7月)
総務係長	坂本和子(1999年7月)―永田 太(2000年4月～2003年3月)
専門職員	城 郁也(2003年4月～2004年3月)
総務担当係長	北原国明(2006年7月)―河端 茂(2009年4月―現在に至る)
会計係長	三村栄史(1988年4月)―田邊武久(1991年4月)―菊池保一(1994年4月)―福田晴夫(1996年4月～1999年7月)
学務係長	和久田 卓(1987年4月)―若林尋重(1989年4月)―吉永 弘(1991年4月)―中西良一(1994年4月)―小原博信(1997年4月)―米村行生(1999年4月～1999年7月)
教務企画係長	米村行生(1999年7月)―高木幹史(2002年4月～2003年3月)
学務係長	高木幹史(2003年4月)―下田 孝(2005年4月～2006年6月)
教務企画担当係長	下田 孝(2006年7月)―島本真理子(2006年10月)―下田 充(2010年4月―現在に至る)



表19 薬学系事務組織年表

年 月	事 項
1973年 4月	教務係と厚生係を統合し学務係となる
1999年 7月	事務一元化により庶務係と会計係を統合し総務係となる。学務係は教務企画係となる。会計係は廃止
2000年 4月	事務長補佐が廃止となり専門員となる
2001年 4月	専門員は廃止
2003年 4月	附属病院、医学部、薬学部の事務部を統合し医学薬学等事務部を設置。薬学部事務は、学務課課長補佐と専門職員を配置し、総務係は廃止。教務企画係は学務係となる
2004年 4月	学務課課長補佐が副課長に名称変更。専門職員は廃止
2006年 7月	医学薬学等事務部を附属病院の事務部と医学部及び薬学部の事務部に分割し、生命科学系事務部となる。薬学部は、副事務長、総務担当係、教務企画担当係となる

#### 4 熊本大学薬学部同窓会

熊本大学薬学部同窓会（熊薬同窓会）は同窓会員相互の親睦を図り、智徳を磨き、薬学の発展に資し、併せて母学の発展を期することを目的として設立された。本会会員は正会員（熊本薬学校・九州薬学校・九州薬学専門学校・熊本薬学専門学校及び熊本大学薬学部卒業生、熊本大学薬学部専攻科を修了した者、熊本大学大学院薬学研究科及び大学院薬学教育部を修了した者）、準会員（熊本大学薬学部、大学院薬学研究科在学学生及び大学院薬学教育部在学学生）、特別会員（熊本大学薬学部、大学院薬学研究科、大学院薬学教育部及びその前身校の教官・教務員として教育に従事した者、あるいは従事している者）、名誉会員（本会に対し功績ある者）からなり、2010（平成22）年現在で、正会員9,452名、準会員632名、特別会員438名、名誉会員1名で構成されている。現在の同窓会の活動は、会報の発行（年2回）、名簿の発行（4年に1回）、卒業写真贈呈、会員の慶弔の連絡、支部会・クラス会用のタッグシール及び名簿の手配、同窓会役員会開催（年2回）、同窓会総会への報告（年1回）、熊薬研究助成会の開催（年2回）、熊薬研究助成会運営委員会の開催（年2回）、新卒生への国試模擬試験の案内、再就職者への案内・研修、卒後教育、学部学生のスポーツ全国大会の援助、薬学部広報活動への援助、薬学志望者への支援、ホームページによる情報発信である。

表20 歴代熊薬同窓会会長一覧

氏 名	備 考
上野 景治	元同仁堂会長
柴田文一郎	
加瀬 佳年	
久保田幸穂	
久野 拓造	
柴田 元雄	
杉井 篤	
古川 潮	
國枝 武久	
上釜 兼人	
田代 昭	化学及血清療法研究所役員

新制大学発足後に限る

1995（平成7）年8月1日、熊薬研究助成会が、熊本大学薬学部、大学院薬学研究科及び熊薬出身の若手研究者の研究を奨励し、もって薬学の向上発展と社会福祉に寄与することを目的とし発足した。2010（平成22）年現在、本助成会を支援する組織である通称1-10千人会には約1,400名が加入し、これまで59名の若手研究者に助成金が贈呈された。

1885（明治18）年の開学以来、多くの教職員及び卒業生の献身的な努力により熊薬独自の学風と伝統が培われてきた。

その中で熊薬同窓会は母校と卒業生の結びつきを軸に堅く結束している。現在の熊薬同窓会の目を見張るばかりの発展は、ひとえに同窓生並びに教職員の丸となった物心両面の支援によるものである。更に数千名にも及ぶ同窓会員の組織化の成功は歴代同窓会会長並びに各県支部長の尽力によるものであり、特に、同窓会発展のために尽力した功績を称え、新制大学発足後の同窓会会長の氏名を表20に示す。

## 5 熊薬自治会

熊薬自治会は学部3年生が執行部を構成し、薬学部の学生活動をサポートしてきた。1967(昭和42)年、自治会主催のもとに熊大祭の一環として大江キャンパスにて薬学展が開催され、11月2日、3日の両日にわたり各教室の研究状況の開放展示、映写会、文化サークルの展示などが盛大に行われた。1978(昭和53)年10月28日、29日の両日には12年ぶりに薬学展が開催され1,500名の参加者があった。次いで1982(昭和57)年11月6日、7日の両日にも学生自治会主催の薬学展が催され、「薬学部をみつめて」というテーマで全研究室によるさまざまな公開実験があり、大変盛り上がった。この時から4年ごとの開催に決まった。1986(昭和61)年11月2日、3日に納富勝彦(薬科学科4年)を実行委員長(自治会長)として「薬学に親しもう」というテーマで学部生主体の薬学展が開催された。1990(平成2)年11月3日、4日には「薬と健康」というテーマで開催されたが、1994(平成6)年は改修工事のため延期され、

1年遅れの1995(平成7)年11月5日に山田泰弘(薬科学科3年)を実行委員長(自治会長)として5年ぶりの開催となった。この年以降は、高校生などに対するオープンキャンパスという意味も含め毎年開催となった。表21に開催日と実行委員長を示す。ここ数年は、後夜祭を行い、体育館にてバンド演奏で盛り上がっている。

なお、熊薬自治会の現在の主な活動は、サークル活動の支援、薬学展の運営、卒業謝恩会の開催などである。

表21 薬学展開催日及び熊薬自治会長(薬学展実行委員長)一覧

開催年月日	実行委員氏名	学 科
1996年11月3日	田尻 貴裕	薬科学科3年
1997年11月2日	首藤 剛	薬科学科3年
1998年11月1日	出口 恒夫	薬科学科3年
1999年10月31日	貝塚 拓	薬科学科3年
2000年11月5日	長井 一史	薬科学科3年
2001年11月4日	棚治 隆史	薬科学科3年
2002年11月3日	横尾 浩司	薬科学科3年
2003年11月2日	石丸 武史	薬科学科3年
2004年10月31日	岩永 卓宏	薬科学科3年
2005年10月29、30日	山田 政典	薬科学科3年
2006年11月3日	瀬戸口 誠	薬科学科3年
2007年11月3日	丸尾桂太郎	薬科学科3年
2008年11月3日	品川 拓也	薬科学科3年
2009年11月3日	山本 修平	薬科学科3年

### 参考文献

- 『熊薬百年史』
- 熊本大学薬学部、医学部、医学部附属病院、生命科学研究所、発生医学研究所及び生命資源研究・支援センターのホームページ